

松葉名所和歌集第一 一名号大類考 伊

石清水

山城

- 一 歌集石清水松陰たかく影見えたるたゆぐもあらず方代迄に
- 二 堀後春毎にすみもまかなん石清水がましの花の陰やにみん
- 三 回 若が代の長閑き影をくみしれは流たなせぬ石清水哉
- 四 回 石清水がましの花のすしなら初る心をくみて知らん
- 五 六帖思ふとは何とも更に石清水心をくみて人はしらねん
- 六 拾玉いほし水香咲花のちるみやに雪もめぐす山あめの袖
- 七 回 都ちがき宮井をみれば石清水水猶古御もすみまりけり
- 八 回 昔より誰かをろかに石清水世にすむかひのあるに任て
- 九 回 石清水神の心のすみしよりかけをならへたる松哉
- 一〇 回 朝日さすみかすの山は石清水今行末せはる哉ける
- 一一 拾玉よりかりしみなりとなれば石清水水はるくと澄さましける
- 一二 回 石清水流れ久しき皇の千代のみかけは神のまに
- 一三 名寄たしきを守ときけは石清水いと頼の深くし有哉
- 一四 五音神風や柳裳瀧川も石清水水若か急とすすみ初めけん
- 一五 月清月のすむ秋の最中の石清水こもゆと神の光成ける
- 一六 回 石清水すむも濁るも世中の人の心をくむにぞ有ける
- 一七 回 濁るせも濁すめとてや石清水流に月の光とぞむしん
- 一八 愚草石清水月には今も契もかん三たひかけ見し秋の半を
- 一九 玉吟八幡山松陰涼し石清水夏をきまてや跡をたけけん
- 二〇 夫木すみける所をくみて石清水なごしの比は過ぎくらん
- 二一 回 石清水澄ほしあけん月影のみの衣にかけせうつりし
- 二二 回 石清水わがら道や守らん月ふのみゆきの空そ長閑き
- 二三 回 石清水たえぬなれば夏の月社のこけもむかしおほえて

- | | | |
|------------------|---------------------------------|------------------|
| 貫之 | 二 四 象集いなり山尾上になてろすきくに行かふ人のたえぬけ小哉 | 源順 |
| 忠彦 | 二五 回 稻荷山行かふ人若が代をひと心に祈りやはせぬ | 伊勢 |
| 常陸 | 二六 回 ひとりのみ我とえなせくにいなり山春の霞の立かす見 | 貫之 |
| 大進 | 二七 回 春霞立まじりたる稻荷山こゆる思ひの人のしれぬ哉 | 同 |
| 源よし
の巻ん | 二八 回 いきにもいたらぬ鳥のいなり山こゆる思ひは神ぞ知らん | 同 |
| 慈鎮 | 二九 回 さしてくらいなりの山の道遠み花あたりは宿やかしまし | 元真 |
| 同 | 三〇 堀後いなり山やま下水を踏ひあけて若かかけにならん哉 | 能宣 |
| 同 | 三一 回 いなり山しるしの杉を尋きてあまねく人のかすすけふ哉 | 顯仲 |
| 同 | 三二 回 稻荷山しるしの杉を春霞にたひまきさけふにも有哉 | 仲実 ²⁴ |
| 暮下 ¹⁴ | 三三 堀後いなりにも思ふ心のはすはしるしの杉のふられましやは | 俊頼 |
| 同 | 三四 回 稻荷山さかしくとも心哉見を杉の葉をふける庵に | 忠彦 |
| 同 | 三五 回 さそくとく宿を出ついなり坂のはれはくたる都人哉 | 同 |
| 中務 | 三六 回 いなり山しるしの杉をこしはへて思ふ心とねきにわぬつゝ | 常陸 |
| 家隆 | 三七 回 稻荷山しるしの杉を尋つゆふかけてこそ帰りまにけれ | 大進 |
| 俊景極 | 三八 拾玉雪降はせれとも見えすいなり山いつ成らん杉の村立 | 慈鎮 |
| 同 | 三九 回 いなり山せの二月の初午に乘てそ神は人を道にく | 同 |
| 同 | 四〇 回 ちりとる光をみせよいなり山杉の庵の窓の明ほの | 同 |
| 定家 | 四一名寄いなり山峯の杉村立出て明ぬとつる友からす哉 | 信家 |
| 家隆 | 四二 回 いなり山杉の庵の明ほの窓より通ふさまの声 | 家隆 |
| 元輔 | 四三月清集いなり山嶺の杉村風ふりて神さみ渡りしての声かな | 俊景極 |
| 衣笠 | 四四 夫木稻荷山杉の青葉をささしつ帰るほはるまけふの諸人 | 有家 ²⁰ |
| 為家 | 四五 回 二月やけふ初午のしるしとていなりの杉はもと葉もなし | 光俊 |
| 後鳥羽 | 四六 回 むら菴木末のともあらでびていなりの杉にゆふかけて鳴 | 隆房 |

青虎

山城

加茂篇

四七千載千早振齋宮のありす川松とともぞ陰ほすむへき

四八松玉昔よりいきの宮に吹初てけふは涼しきもの河風

四九名寄言の葉にやけても何ぞ思出らぬいきの杜のしめの下草

五〇夫木ちはやふる齋宮の庭の松いくら十年もとあかせん

五一同 思ひやる齋宮は跡ふりて花咲のころかづはたかな

五二同 ありす川いきの庭の秋の花千世といねたる松虫の声

今宮

同

類多

五三 後拾白妙のともみてくらととり持て祝ひぞむ紫の野に

五四同 今よりはあしゆる心ましますな花の都に杜すたぬつ

岩神社

山城

名寄テリ

五五名寄岩神を頼むかひには世中にかしらかたて過しつる哉

五六玉吟岩神の杜の下露ゆもかけて大客人のすむ比かな

五七夫木あし事をもとふ岩神の難面まに我心のみうきぬる哉

石蔵

小野

同

拾芥云云 蜀山 在之今案二
東山 蜀山 在之今案二
有云云 蜀山 在之今案二
有云云 蜀山 在之今案二

五八万七岩蔵の小野の秋津に立渡る雲にしもあひや時おきたん

五九名寄岩倉の小野に立出て詠けは秋津の方は猶時雨けり

六〇 家集世のよみは岩蔵山にぞあて置て万代まてに君ぞつたへん

六一夫木ときなして鹿はなりぬと岩蔵のまの秋津と月せき見えたる

六二新勅足引の岩蔵山の白かけ草をさすや神のみしと成らん

石影

山

同

拾芥云云 蜀山 在之今案二
北野 蜀山 在之今案二

後玄極

石影

同

西行

慈鎮

六三 家集しにてふらん昔の運を思ふよりかねてしらるる岩陰の露

長明

六四 拾玉 夏も猫氷室とともにもるをしの涼しくみゆる谷の岩陰

元輔

六五 同 昔のうへにはれ行雨の岩陰に風こそ過れ春の空

俊成

六六 家集身をすれば哀とぞ思ふ照日うすき岩陰山に咲く卯花

長能

六七 同 水堂山いかに契て岩陰や夏も氷の測となりけん

泉河

里

山城

藻塩 相業 都

俊成

同

六八 夫木 岩陰や松か崎との氷堂山いつれ久しきたあし成らん

清輔

六九 万四家人に恋過ぬやも蛙なくい女の里に年のゆけは

家隆

七〇 同 六 泉川行瀬の水のたえはとぞ大宮所つりもゆかあ

宿禰

七一 同 九 妹が門いりいみ川の床なめにみゆき残りりまた冬かも

兼業

七二 同 十 七 たてなめて泉の河の水を絶すつかまつらん大宮所

衣笠

七三 六 音 船とあぬはあらしな泉河柝の森に紅葉しぬれは

定家

七四 拾玉 泉河はその森に夕間暮まつ秋のいろも涼しかりけり

同

七五 折六 泉川渡る小船のうらみに浅瀬せしるま行なやみつ

家隆

七六 名 寄 夏ぞかく成にけらしな山しろの泉の里に蛙鳴なり

同

七七 愚草 泉河日も多くれのこま錦かたえおら行秋の紅葉

同

七八 同 いみ河ゆきの船は漕過て柝の杜に秋ややすらふ

同

七九 玉 吟 月影もけふみかの原泉川波の宿せ今しほし見ん

同

八〇 同 五月雨は渡りを遠み泉河に山見えす雲ぞかきれる

同

八一 十五 百 ざりとともよもたにては山城の泉の小菅いかにあみん

同

八二 夫木 行春の色とはいはし蛙なくいみみの里の山小きの花

同

伊平

八三同 泉河すむこよは明おろし遠方浪の岩ゆるみゆ
 八四同 下くろ水こそあらぬ泉河かはへ松に通ひ秋ぞせ
 八五同 麻葉も水上かけて泉河こま山人や御破つしん
 八六同 拙入のたす宮木も泉河がすみながら春はなかる
 八七同 泉川夕たわりきて山城の杵の森に宿やからまし
 八八同 白妙の夕波すし泉川はその社の竹の下の道
 八九同 泉河川浪涼し水鳥のはその社の夏の夕暮
 九〇同 五月雨は水上まさる泉川かさきの山も雲かくつ
 九一夫木泉河水のみわたれ松の上に出かけ涼し秋初風
 九二同 秋の色をよみか原泉河むすは露の玉の井の水
 九三同 泉川にまの渡りのとまりにもまたみぬ人の恋しやなぞ
 九四同 山城のやまとにがよ小泉河これやみくにの渡成らん
 九五御葉泉河は波しらく吹風は夕涼しもせ山のま

石田小野 杜岡 山城 蓬盛ニ世郡

九六才丸山科の石田の小野の杵原みつや若が山路ゆゆらん
 九七同 山しなの石田の杜にのみえはけたしわきもたに逢んかも
 九八同 山城の石田の杜に心をそく手向したれば妹にあひかたき
 九九同 山科の石田の杜のすあ神にぬき取向て我は越ゆかん
 一〇〇六帖山城の石田の森のしは原いねと秋は色に出にけり
 一〇一同 聞からしにもゆるなげきは山城の石田の森になく呼子鳥
 一〇二六百番秋ぞかし石田のいはずとも杵の原に紅葉やせぬ
 一〇三同 山科の石田の小野に秋暮て風の色ある杵はらかな
 一〇四同 秋ふかき石田の小野の杵原下葉は草の露や染らん
 一〇五名寄雁金も今や越らん山城の石田の小野に月傾さぬ

詠人 一〇六 愚草衣とも今石田の色の秋の紅葉を波にぞかる
 公朝 一〇七 玉吟まてしやは美に類めし鶉鳴石田の小野の秋の夕暮
 後九条 一〇八 千五百秋や来るとへとしら露風涼し石田の夏の夕暮
 家隆 一〇九 同 誰とたに石田の小野の藤はまよほく暮に匂ふ袖哉
 衣笠 一二〇 夫木萱咲石田の小野にしめざらんゆきこの人のまこもふし
 家隆 一二一 同行春の形見かてらに山城の石田の小野に萱摘なり
 如願 一二二 同 つめや鶴石田の杜の下草にまほる萱の色せことなる
 俊成 一二三 夫木山城の石田の岩つしはまほき花の色哉
 和部 一二四 同 山しろの石田の早苗とる田子のつかに休む森の下風
 有家 一二五 同 此里をわきて時雨や染つらん若田の小野の秋の紅葉
 詠人 一二六 新六初しくれ巨母にふれは山城の石田の杜は色付にけり
 不知 一二七 同 加茂常 石見在同名

後鳥羽院 一二七 純後拾石川やあはぬ契や結ひ置し花田の帯の移りやすまは
 同 一二八 千五百石河や蟬の小川のなかれにも逢瀬ありやと御破をぞする
 宇合御 一二九 名寄御手洗の絶ぬにしるし石河やせみの小川の清きなかれは
 同 一三〇 同 石河や蟬の小川にいくたてぬきしあせは神に任せつ
 人丸 一三一 夫木石川や花田の帯の中たえはまの渡の人にかたらし
 無名 一三二 同 石河や蟬の小川の流てぞ今も絶せぬかのみたらし
 紀伊守 一三三 名寄花の色はらも千草にみゆれともちれはひとに残らざりけり
 詠人 一三三 同 山城 蓬盛
 有家 一三三 同 山城 蓬盛
 隆信 一三四 夫木水上もしくせみゆる市川はほの波のたは成けり
 家隆 一三四 同 山城 蓬盛
 式部卿 一三四 夫木水上もしくせみゆる市川はほの波のたは成けり

今里

同 薙塩

一五 新六 雨ふれはかたそはつるいま里の古道とあて塔ら山水

一六 薙塩 日くるれは遠の今里蚊火たて鳥羽田の面に畑たひ引

知家

一四五 同 伊駒山雲のいにしへしらねとも晴ぬ時雨に思ひ侘つ

同

伊佐奈美滝

同

一七 夫木 山城のいづなみ滝に白へいとともほすすくせなげれは

為家

一四七 才四 石上ふるとも雨にさほらめや妹にあはんも契し物を

像見

伊駒山

嶺

大和

類字二説河内

一八 才十 妹かりと馬に鞍置て伊駒山打越くれは紅葉散つ

一九 同十二 君かあたりみつもをらん伊駒山雲なかくしと雨は降とも

二〇 同十五 夕されは日くしき鳴いま山越くも帰る妹めをほり

二一 同 妹にあはずあらはずなみ若根ふむいまの出を越てとめかくる

二二 同 廿 難波とも漕出てみれば神さふる伊駒高根に雲を棚引

二三 同 廿 難波とも漕出てみれば神さふる伊駒高根に雲を棚引

二四 名 奇 難波へふりてけみらん古柳の伊駒高根の初桜はな

二五 志 草 津國のや咲花と今も見る伊駒の山の雪の打きえ

二六 同 伊駒山いびむら嶺にふる雲のうきて思ひの消る日もなし

二七 玉 吟 村雲の伊駒の山にふるより詠る袖も打時雨つ

二八 同 伊駒山むし雨遠く出る月雲もかくさぬ嵐吹し

二九 同 筒根より霧吹おろす秋風に麓もみえぬいま山哉

三〇 夫木 伊駒山あだりの雲と見るまでにおこしの桜花咲けけり

三一 同 高安に移りけりけりな時鳥伊駒の山を越てかたし

三二 同 伊駒山麓の野へも霜枯て住家もみえぬくは虫哉

三四 御集 いま山いとみし雲はなげれとも霞せかふる春の明ほの

三五 同 身をめていとみし人々哀なる伊駒の山の雲をみるにも

石上 寺

同

一四八 同十一 石上ふるの神杉がみひても我れせさうく恋にあひにける

一四九 同十一 石上ふるの神杉神になる恋をも我はさうにすうかも

一五〇 同十二 吾妹子やあも忘らすは石上袖ふる川の絶んと思(は)

一五一 一家集 いはみまきもか石上ふるの早苗もいた出ぬを

一五二 同 石上ふりにし里まきてみれば昔かこし花咲にけり

一五三 同 立帰る思ひ出れと石上ふりにし恋は忘れさりけり

一五四 同 せめかへいくしは(か)石上ふる松葉を結びとく哉

一五五 同 年まへていふるさる石上なるたにかへて世をへてし哉

一五六 同 野へ(と)にみとりせまざる石上ふる春雨の隙しなげれは

一五七 同 石上ふる春雨のつく(と)世のはかなさと思ひしらる

一五八 同 朽にけり人もあはす石上ふるの涙に渡す丸はし

一五九 同 年月は立はれとも石上ふりにしかたを忘やはする

一六〇 六言 恋せめ(心)はいつぞ石上都のまぐのたくれの空

一六一 出家集 石上ふるき住家(分)れは英の浅茅に露せこぼる

一六二 拾玉 石上ふりにし人(と)はん君が齢(の)たひ有れと

一六三 同 いそがみふるき都に立春は霞の色もさきしかりけり

一六四 新六 石上なるよふきの鐘の音にふるくはる世を聞て悲しき

一六五 名 舟石上ふる川野への柳陰めくもあぬ春の暮哉

一六六 同 石上ふる河小野のせきつはた春の日数は(た)てきにけり

一六七 同 石上ふるの高橋たかしくも見えす成行五月雨の比

同

同

無名

無名

人丸

無名

家持

清正

友則

小太君

信明

公史

河内

頭仲

河内

信定

西行

慈鎮

同

為家

具親

讃岐

一六八 夫木昔より植けん時を人しれず花にふりぬる石上寺

雷山 大和 桑塩

一六九 万三皇は神にしまは天雲のいかつちの山に庵するかも

一七〇 万三夫君は神にしまは雲かくれ雷山に居しきあます

一七一 夫木夕立の雨しふれは天原いかつち山はかきくもりつゝ

稻洲 山姥 大和 類多

一七二 続古年をふる涙よいか逢事は猫いな涙の魂まされとや

一七三 名舟秋ははやいなふち山の養声よはり行暮そ悲しき

一七四 夫木はやくより水の水上山のあつこいなせもみえす稻洲の滝

磐余 池野 同 藤塩十市郡

一七五 万三百伝いはれの池に鳴鴨をけふみ見や雲隠なん

一七六 帖あたりと名たはいはれの池なれば人にぬぬは立にさりける

一七七 同 人のみははれの池のあやなくにことなし草の宿にそはん

一七八 名舟けふこははれの野へのしの津忍ひもあへずはのあかしつれ

一七九 同 冬されは春をしけみに百伝のいはれの池に鴨を鳴なる

一八〇 山妻集ぬ覚つ長き夜かなといはれ野に幾秋までも我身ぬ覚

一八一 同 磐余野の萩が純間のひまぐにこのてかしの花咲にけり

一八二 千五百 哀ともいかな人にははれのいはれすかゝる袖の露哉

一八三 夫木あたりといはれ野に咲女郎花露にぬれ衣まされにや有らん

一八四 同 無名のみははれの野への女郎花露のぬれ衣もあらしな

一八五 同 うしとのみ人の心ははれ野にまねく薄を何かたのまん

一八六 同 なげかしよよしやがにもいはれ野の残草刈草露みだりとも

一八七 同 よしとたに人はえそよははれのちやか下葉にいと乱なん

宮内 一八八 新葉よそにぬははれの池のぬぬははかてくるしがる覧

入野宮 同 八雲御抄

人丸 一八九 名舟ひの隙の入野の宮のさゆる日は川瀬こほりて駒も渡らす

斑鳩里 大和 或河内

定嗣 一九〇 拾遣いかるや富の小川の純はこそ我夫君の御名を忘れぬ

具氏 一九一 初千斑鳩や富諸河の流こそ純御法のほしめ成けり

同 一九二 夫木いかるやよるかか池は水れとも富小河は流たえせぬ

同 一九三 同 限りありし鶴の林のかたみをとほとめ置けるいかるかの里

不説人 法隆寺舍利の御はこの歌を見て

石村 山 同 八雲御抄

藤原 一九四 万三角さほふ石むらも過す初瀬山いつかも越ん夜は更につ

貫之 一九五 同長歌角さほふ石村の道を朝かれすよりけん人の思ひつゝ

同 一九六 同三角さほふ石村山に白妙のさされる雲は夫君にかも

経忠 率河 同 添上郡 神社考テリ

秀守 一九七 七セはぬかづらいます妹もつら若みいさく川の音のさやけさ

西行 同 無名

同 推経 磐瀬 杜野河 同 類多

一八九 万八 神なひの岩瀬の杜の叫子鳥いたくなく鳴や我恋ままでる

上西門 一八九 同 神なひのいはせの森の郭公けなしの岡にいかに来鳴ん

鹿島御 二〇〇 同 武士の岩瀬のもりの時鳥今もなかにぬか山といへけに

類政 二〇一 象集神なひの岩瀬の森のいはすりは恋しつもれる我かちや思

行尊 二〇二 堀百さ夜更て岩瀬の杜のよふこ鳥山ののみそたふへなる

四糸 永縁

為家 永縁

不説人

光俊

道麿

良聖

公朝

磐雷門

春日鷹

山前五

無名

二〇三同 しらぬりの鈴もゆらに岩瀬野にあはせてゆるまししら鷹

頭季 二二六 御集岩橋の神をたのむの雁なれや桜を分てよると鳴也

羽後鳥 124

二〇四愚草 神南備の岩瀬の森のいはすともしれがし下にも朽葉を

定家 110

二〇五愚草 岩瀬野や鳥ふみ立て著鷹の梢もゆらに雪は降つ

定家 伊加々崎 河内 八雲御抄

二〇六玉吟 山川の岩瀬の杜の紅葉や風よりさきまかくるしからみ

家隆 二二七 驚暮草わがみ常陸の海のいかき崎いかくあひみん田子の浦波

高光

二〇七 春休言思ひあまり岩瀬の杜の下露に草はみながら色かはりつ

定衡 二二八 家集昔より聞ぶらししいか崎浅からしと思ひなさん

大納言

二〇八同 思ふ事岩瀬の森のいはすと色にも出よ秋の下草

家隆 二二九 返しはやくより聞なしくけるいか崎末の人さへたのもも哉

大納言

二〇九同 神なみの岩瀬の杜のいはしたく我志まさる鳥の音もつし

家隆 二二〇 名寄立別いはの里になかおしてさやは契し待て侘ぬる

光俊

二一〇同 かくとたに岩瀬の森の初時雨今や梢も色に出なん

知家 稀葉里 同 藻塩

二一一同 志しともいかはせの杜の露かけてもよその袖の色かは

康宗 二二一 夫木引泉の松に立浪のやむ時もなく恋渡るかも

不説人 120

二一二同 今はとて岩瀬の森の下露にあらぬ色にや置まざる覧

定家 石津 和泉 和名二大島郡

二一三 夫木春きぬと岩瀬の杜の鶯の初音を誰にけはしむらん

俊成 二二二 夫木荒々波に風よりさきに舟出して石津の浪と消なまし物を

人丸

二一四同 忍ふるを音にたてよとやさそふらん岩瀬の杜の鶯の声

宋廷 泉杣 同 類字

二一五 類聚 岩瀬川岩浪はしる音もせずいくへおにける水成らん

為家 二二三 名寄木引谷の通路絶にけり泉の松の雪の明ほの

宣行

二一六 夫木ふも山専岩瀬の森の叫子鳥哀しれらん人のまけかし

家隆 二二四 天木宮木引泉の松にたつ民も心あればや花をよく覧

大後手

二一七同 咲とむら岩瀬の小野の小萩原しほしも風にかふよまし

氏良 二二五 同 宮木引泉の松に鳴鹿のやむ時もなく季やこふらん

具氏

二一八同 かつみつ岩瀬の杜にすむ蟬の時もしらすや鳴渡るらん

二二六 同 わがなげきやむ時もなく積をけりいかに泉の松のいかだし

兼九

二一九同 卯花の波立まよふ岩瀬河月の宿もや流なるらん

岩橋 神 大和

二二〇 家集 ふみなみぞ渡しもはてぬ岩橋ぞ中く道の空に侘なん

小次君 生田 小野 杜川浦 撰津

二二一同 いにせん絶間がちなる岩橋を頼わたらん事のかたごま

中務 二二七 六帖津国の生田の川の幾度か我いたらに行帰ららん

忠彦

二二三同 かつらきにつらきくめらに岩橋のせなだに絶る心とそ聞

同 二二八 同 風吹は生田の浦のいく度かある心を我にすらすむ

清和子

二二四 夫木鶯のよると鳴なる岩橋の葛城山の青柳の糸

家隆 二二九 堀百旅への道さまたけに摘物は生田の小野の岩なせりり

師頼

二二五 同 時鳥鳴音ほしく明る間に契みしかきくめの岩橋

知家 二四〇 同 いろくの木葉手向て秋はけいづく田の杜に門出しにけり

国信

二二六 同 時鳥鳴音ほしく明る間に契みしかきくめの岩橋

知家 二四一 六百番はかなしやうききたる風にこそはれていつち生田の杜の木葉ぞ

季経 134

二八四 千首渡こそ猫ふる道にまよひぬれば板田の橋はかけもはなれず
二八五 同 猫ぬれぬ雨もほれて古道の板田の橋の夕暮の空

一諸

二八六 家集入ぬるとよろこびかほにのむまじやいものす酒を問事もなく
二八七 新六 風あらしき漆の神のいものすにもあふ小船ははや入にけり

右諸に入らるに問が満心せたりければ読ともなん

二八八 天木廿五の屋のいさこの山の水上をのほりてみれば布引の滝
二八九 同 蘆の窟の砂の山の上にある滝の白糸見てもかへらん

砂山

二九〇 万二 神風のいせの国にもあしましとを何にかきけん君もあらなくに
二九一 拾玉 浮身をは神にぞ祈る神風や伊勢の茨萩浪にくだすな

二九二 同 がせねとく浦の茨ゆふいせの海や神代の神も嬉しとや見ん

伊勢神

二九三 名身月影もたえずやすまん鈴鹿河せとの宮の代々の古道

二九四 同 磯宮 同 藻塩

二九五 類聚 湖くむ齋のぬも井年ふりてや木にけりものをくえの橋
二九六 山家 葉いつが又齋の宮のいづれに注連の御うちじりりとほらはん

二九七 天木 なかきよのたのみにひかんすも川にえて齋のわたらひのしめ

五十鈴河 河原宮 伊勢

二九八 拾玉 人なみに我言の葉を散すかなはず河原の秋の夕暮
二九九 家集 ちりやる曇りもあらし神風やけり河原の花の鏡は

三〇〇 同 君が代に出ん朝日を思ひかた五十鈴河原の春の曙
三〇一 同 いすく川千年の秋の浪の上に神風来てすめる月影

三〇二 同 しられにき五十鈴河原に玉散て絶せぬ道をみかくへしとは
三〇三 同 道といは君が心にしましや深き行なほいすく川なみ

三〇四 同 神業のさして祈る思ふ事ならずはめくしすく河原
三〇五 表集 神かきやいすく川の宮柱いく千代すめと立ほしめけん

三〇六 同 身としは祈るにはあらて頼こしすく河原哀けり
三〇七 天木 万代に君もすめとやいすく河したつ若根のしき波の声

三〇八 同 みてくらのたやいすくの川波に山の紅葉もぬぎや手向る
三〇九 同 もはやふるいすくの宮のます鏡くもらぬ御世を照すとを聞

三〇 御集 五十鈴川頼む心しふかければ天照神と空に知らん
三一 神道 いすく河清き流にやすらひてしたつ若ねとくましかしこき

三二 同 百首

三三 同

三四 同

三五 同

三六 同

三七 同

三八 同

三九 同

四〇 同

四一 同

四二 同

四三 同

四四 同

四五 同

四六 同

四七 同

四八 同

四九 同

五一 同

為伊

同

俊頼

同

行家

同

後九条

具氏

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

為伊

同

俊頼

同

行家

同

後九条

具氏

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

三九 御来神風や伊勢の浜への晴に霞ふきよる浦の初風
三三〇 山巻塩風にいせの浜寂せはまづ穂末に浪のあつらむな哉

伊勢海 同

三三二 万四いせの海の磯もとらよする浪かしく人に恋渡るかも
三三三 同七いせの海の巻のしまつる鮎玉とりて後も恋のしけらん
三三三 同十一 伊勢の海に鳴ける田鶴の音とらも君か聞えは我恋んやも
三三四 家来とはねとも深き心はいせの海にのなるあまにもとりやはする
三三五 同 浪間わけみらぬふいせの海にわれのたの名残成らん
三三六 同 丁たかひに猶も頼むがいせの海のあまのたくなはくり返しつ
三三七 同 伊勢の海の巻の釣舟春風はなごを高めかたわふらん
三三八 縁巻いせの海の深き心をとらすてふりにし跡と浪やけつへき
三三九 六百番 伊勢の海の塩瀬にはく細石のくたけて物と思ふ比かな
三三〇 同 どの海の底までつく巻なれやみるめだんを思ふ心は
三三一 拾玉 伊勢の海におつきあつめてもし草をほり乱ねえにそ有門ら
三三二 同 かさねとく浦の波ゆふいせの海に神代神も嬉しやみん
三三三 名寄 伊勢の海に巻のりもてふ志貝わすれにけし君もまきさね
三三四 同 伊勢の海玉もる波にさくら貝かひある浦の春の色かな
三三五 同 いせの海江の草の塩干かたあまも登の玉はひろはん
三三六 同 いせの海の磯の中道いせけともは朝塩の満をしける
三三七 名寄 伊勢の海の塩瀬にひく寂寂の程なきふしに何しほる覧
三三八 天木 七の海の巻のあさたのまてかたにりや取らん波はなみ
三三九 同 伊勢の海あまのまてかたならねとも恋のせあきもいふかりけり
三四〇 同 伊勢の海あまのまてかた行帰りにくほす塩のまなく恋つ
三四一同 いせの海の巻のまてかたかきつめて幾度あなし藻塩たる覧

羽使鳥 三四二 遠来首いせの海霞む塩ひのかたをなみ帰るや雁の声そきこゆる
西行 三四三 同 伊勢の海のなきたる朝の春の日にうし〜通ふ巻の釣舟
三四四 同 いせの海の沖つ春日の朝なまに過ぎはとあまの釣舟
三四五 同 玉藻がるいせの海士もいしまみ永日も猶あがすや有覧
無名 三四六 同 いせの海塩もしらぬ夕なまに霞を分て玉や拾はん
人丸 三四七 須磨巻 伊勢嶋や塩ひのかたにめりててもいふかひなきは我身也けり
斎宮 三四八 家来いせ嶋や月の光のさびるうらは明石には似ぬ影ぞすみける
元輔 三四九 名寄 浪帰る猫みてゆかいせ嶋やしまのくりする草り浦風
元真 三五〇 月清 伊勢嶋や塩ひにひくふたま〜も手に取程の行も知せよ
寂達 三五二 天木あけはまたさかひへたていせ嶋やかりの使の行や別ん
家隆 三五三 御来 伊勢嶋やらしの浦の巻乙女春をむかへて袖やはす覧
意鎮 三五四 千載 伊勢嶋やらしの浦の海士たにもつかぬ袖はぬるる物かは
同 一志浦 池 同 類ま

伊勢嶋 伊勢

定家 三五五 折古けふとや磯な橋らんせ嶋や一志の浦の海士の乙女子
家隆 三五六 同 桜咲むろの山風吹ぬらんいせの池にあまる白波
知家 三五七 御来 伊勢嶋や一志の浦の巻乙女春をむかへて袖やはすらん
寂達 三五八 玉葉月清 小夜更行はせ嶋やらしの浦に千鳥鳴也
式部 三五九 春雨玉藻がるいせの海士のぬれ衣夕日も寒く散降也
顯昭 泉野 伊勢 名寄三り
行能 三六〇 名寄 伊勢人はひかことしけり津嶋よりかい河行はいつみ野の原
衣笠 長明

岩出

同

伊勢に祭主輔親が立たらぬはて手より三
味堂のほら貝のうせたるをこひ侍けるを

つかはすとて

三六一 新橋道がすかなる谷のほら貝を思ひやる秋風のみや吹てとふらん
三六二 家集遠方やと山のすそを志しともいはて思へば知人もなし

右伊勢に侍りける比祭主親足御いはてと云家
まかりてのち向ひの山つら優なりけるを思ひ
出てよありけるといはん

池浦

同 和名度余郡 伊気

三六三 名奇松に吹池の蒲風渡らん浪にたよふ浮嶋の山

家田松

同 名奇ニアリ

三六四 名奇朝ほけ家田の松も暮こめておほいばしやめの板橋

去来見山

同 勅撰名所集二三四

三六五 才一音妹子といさみの山を高みかやまのを見えぬ国遠みかやも
三六六 名奇再来といさみの山の紅葉の時雨にあへる色のてくらせ

三六七 斯六 咲ぬらんといさみの山の花柳霞はよせに立へたつとも
三六八 夫木駒なわいさみの原の紅葉は今も秋を知らん

磯等崎

伊勢

三六九 神来いせらか崎に鯛つる海士のゆきも子か為と鯛つる養の
三七〇 六百番みまゝおろいせらか崎にあざりする養もみるめは猫求めけり

三七一 夫木伊勢嶋やいせらか崎の朝霧になし小船漕はなれつく

三七二 同

いせ嶋や磯等か崎にすむ月の影もよきくあけのてま舟

盛方

三七三 同

嶋陰に立別つる名嶋やいせらか崎の雪のむら消

敦仲

三七四 神道むきもこのいせらか崎に鯛つると聞も心のたましき哉

兼邦

伊良度嶋 崎

志摩

伊勢 後頼

三七五 才一 二つ麻とをみの大若養なれやいらか崎の玉もかります
三七六 同 空蟬の命をおしみ波にひていらか崎の玉藻かあります
三七七 同 塩さぬにいらか崎迎漕舟に妹乗らんかあらき嶋わを
三七八 同 塩さぬにいらか崎と出る船は漕渡せしまきもする
三七九 同 山家集いらか崎たかづを釣舟ならひうきまはらの深うかひてせよる
三八〇 同 ず鷹渡まいらか崎をうたかひくを木にかくる山帰り哉

無名 同 人丸 同 西行

叙阿

三八一 名奇雲の浪いらか崎に分捨て長閑に渡る秋の夜の月
三八二 同 鶺鴒す嶺の原を朝行はいらか崎にたつ鳴渡る
三八三 同 夫木しら波のいらか崎の志貝人忘るとも我わすれめや
三八四 同 養のからいらか崎のなのりそのなのりも果ぬ時鳥かな
三八五 同 浪もなしいらか崎に漕出てわれからけゆるわかめか蜚
三八六 同 みぞおろいらか崎のてなれ松幾代の浪にしほれきぬ覧
三八七 同 夫木なくさめにびくは袖やぬれ増かいらか崎のこみ志貝
三八八 同 若に生るいらか崎の松よりもつれなき人はねかたかりけり
三八九 同 我志はいらか崎の養なれややく塩齋の畑たえねは
三九〇 同 あざりするいらか崎の養のこはうかかおもえとみる覧
三九一 同 玉吟嶋はくいらか崎の塩さぬに渡る千鳥は声ほのせ也

長明 同 基俊 匡房 西行 詭人 不知 為志 清輔 参西 季経 家隆

石田里

尾張

三九二 夫木いまよりやいはたの里の秋風も夜来にふけは衣うつらん

為家

出生寺 参河 藻塩

三九三名奇類かな我まはすすなうの世を出て生るごとくそきり

練王

四〇三夫木我もまたかりねにむす山庵原の清見が崎に月もがかり
四〇四同 清見端打出てみれば庵原みほの沖つは浪しつがせ
四〇五草葉松に少く塩風寒みいば原やみほの興つに千鳥鳴也
行能
為氏
頼阿

池田里 遠江 藻塩

三九四夫木いつさのおひうたれたるたなつものいけ田の里に雲をほしつ

為相

四〇六新掃達たのめてもこぬみの汝の興つ風何いほ崎の松に吹らん
四〇七続後庵崎のこぬみの汝のうつせ貝藻に埋ひて幾せお賢見
俊頼
能譽

引佐細江 同 類名

三九六万四千とあふみいなさ細江のみまつくしあれをたのめてあまし物を
三九七千載逢事はいなさ細江のみまつくし深きしるもなき身成けり
有輔
無名

為相

四〇八夫木庵崎のこぬみの汝の友千鳥朝みつ塩の音さほくせ
四〇九同 風吹はとはにのみこす庵崎のこぬみの汝は舟もかよはず
為家
宜代

伊間浦 同 類名

四〇〇道之記浪の音も松の嵐もいまの浦に昨日の里の名残をぞ聞
此歌路次記云遠江国府見のうしに(きぬ
爰に宿りて二日留りたるほとに泉郎
小船に梅さして浦くの有様見めくれは
塩海水海の中にすさき遠くへたよりて
松とさうくにおひけるまほしものとにあ
みにたり云々

為相

四一〇万二千いほき山た越まませ庵崎のこぬみの汝に我立またん
四一一六帖いかにせありときこしは岩城山君の心はなれる成けり
四一二玉吟つれもなき磐城の嶺の岩つし折てつたふる山人もかな
家隆
同

駿河 伊豆高根 同

四〇一才いはらの清見が崎のみほの浦のゆたに見えつ物思ひもなし
四〇二同 庵原や清見が崎の磯枕たひみれとあかぬ浦哉
家長

田口
益人

四一三同 岩城山越てこぬみの汝ひさき久しく成ぬ浪にほれて
四一四玉吟いほき山なけきも程は有物を恋さし恋は松ならす共
家長
同

伊豆小山 伊豆 伊豆高根 同

四一五夫木いたつらにゆいもつし心なき岩城の山の花の多はへ
四一六同 心なきいはきか山の時鳥初音は人にさそおしむ覧
円勇
定春

家長

四一七同 駒なつむ岩城の山を越かてて人もこぬみの汝にかもぬん
同

伊豆小山 伊豆 伊豆高根 同

四一八続後千早振いつの小山の玉椿八百万代も色はほほし
四一九万四千まかなしぬくはななくはななくはいつの高ねのなる次すま
無名

鎌倉
鎌倉

伊豆高根 同

四二〇同 伊豆高根 同

同

同

伊豆海 同

- 四二〇 千田川の海に立白波の有つともつきなん物をみたれしゆや
- 四二二 玉葉箱根路を我越くれば伊豆の海や沖の小嶋に波よりみゆ
- 四二三 夫木伊豆の海や興つ浪路の朝なきに遠嶋きえて立霞哉
- 四三三 同 一つの崎海と波とのめもはるにそのきは見えぬ雲の夕なき

板野 甲斐 名寄テリ

- 四三四 甲斐の國の郡のいた野なる白玉の菅並にぬひけん

色河 相模 藻塩

- 四三五 名寄なかれてはよるせにならうといふならは幾世とてつかひかはる覧

入間 里 武蔵 和名天間郡

- 四二六 藻塩まじりともとのむ雁を頼みにしてしまの里にけしと入ぬる

庵崎 下総 類々

- 四二七 名寄庵崎の角田河原に日は暮ぬ閑屋の里に宿やからまし
- 四二八 吟月影のさすや庵崎の角田川越てまの山の山のみより
- 四二九 夫木夕これは誰忍心とて庵崎の角田河原に千鳥鳴なり
- 四三〇 建保今夜又誰宿かしん庵崎の角田河原の秋の月影

伊香胡崎 常陸

- 四三一 秋葉常陸のらしかご崎の心月ひつふかひなき物にも有哉

稻敷里 同 和名倍木郡

- 四三二 夫木侘つもわくて幾世と過ぬ覧かりぬはねいなきの里

伊佐々河 同 夫木当国

- 四三三 夫木せきしむる人もなき世にわししくてはこの河の行もやらぬ

伊吹 山 高里 近江 美濃 同名

- 無名 四三六 帖春きぬと今は伊吹の山へよりまたしかりけり鶯の声
- 鎌倉 四三五 城白秋たていふきの山の山あらしの秋涼しく吹つるかな
- 為道 四三六 山叢集おほつかに伊吹風の風さきにあさつま船はあひやしぬ覧
- 慶融 四三七 同 くれ舟よ朝妻渡り今朝なせと伊吹の嵩に雪しまくせ
- 伊勢 四三八 名寄さなまざる伊吹の嵩の山嵐に氷けてたなごの内海
- 四三九 同 いつしかも行くかたらん思ふ事伊吹の里の住うかりし
- 四四〇 愚草 秋をやく色にとみゆる伊吹山もえてスき下か思ひも
- 四四一 同 志すともやなれも伊吹の時鳥あははむもゆとみゆる山路に
- 四四二 建保 夕つくひすすや伊吹のさしも草露にもゆる色は見えたり
- 四四三 同 さ波や浦より遠きみ渡せば伊吹の嵩にむらむ村雲
- 四四四 同 玉がつら伊吹の山の秋の露たか面影の松むしの声
- 俊成 四四五 同 雲はら山伊吹の山の秋風も待ける月の狂明のそくし
- 四四六 建保 つけしとや誰も伊吹のさしもまたたて出る山のはの月
- 光俊 四四七 同 弥高山 近江 類々
- 家隆 四四七 拾遺 近江なるいや高山の樹にて君千世は初りかてん
- 伏忠 四四八 玉葉 雲晴て照す月日のあきらけき君まそあしく弥高山
- 順徳院 四四九 夫木 蜂の声いや高山の木木や旅行人のやとりなるらん

伊香胡山 浦海 同 類々

- 元真 四五〇 八いかに山野へは咲たる萩みれば君か宿なる尾花しぞ思ふ
- 四五一 同 つるきたらさやもぬき出ていかん山いか我せん行名知すて
- 喜多院 四五二 秋集 いげやなしとてや人いそく覧いかん浦はみるめなしとも
- 四五三 夫木 相模や閑のあなだのいか山に待みん年はへぬとも
- 四五四 同 わさかはいかにこの海に昔よりおのぬみるわと人のかるまで

不知 247

仲実

西行

同

清言

走教

同

行意

為家

順徳院

範宗 250

知表

為久

經光

匡房

金村

朝臣

俊類

河院

相模 250

四五五 音にみきけはひらひし近江なるがいかて相見てし哉 躬桓

不知セ河

同 類多

とても待程に風いたくふけは馬より走りて
よもきのなかによりふして

四五六 万四近江路のこの山なるいざや河けのころくは恋つもあらん 無者

四五七 同十一 いぬがみのこの山なるいざや川いざとをきせ我名つけすな 人丸

四五八 夫木時鳥きも別れすいざや河いざや又ともばぬ初音は 為家

四五九 同 相坂の関のあなたいざや川いざや渡りて末をたえまし 経道

四六〇 名奇うしたにいはいさそなといざや河いざやいななる我身成覽 四七〇 天木横田山いしかはらのよもきふに秋風寒み都恋しも

四六一 朝花いたくらの山田につめる稲もみておさまれる世の程を知哉 顯輔

板倉山

同 類多

石根山 池

同 藻塩田国歌枕三再後

四六二 夫木足曳の板倉山の嶺までもあめかりほを見るかうれしき 匡房

四六三 万四夫木上のこの山なるいざや川いざとをきせ我名つけすな 大進²⁷⁺

大上

同

顯輔

同

同

大進²⁷⁺

四六四 夫木園にもせにつくれるみよのたにたてわいほの河の音のさやけさ能直 俊成

伊保乃井河

近江

能直

同

同

俊成

四六五 同 近江なるいほの井川の水すみて千年の数は見え渡るかな 誠人

四六六 新古都にも人や待らん石山の嶺に残れる秋の夜の月 長能

四六七 家集冬くれはつしやまざる石山の氷はかたき物とししなん 重之

石山 橋

同

長能

同

同

重之

四六八 明玉かくしついははつきんは衣のたすきなる石山のはし 法性寺

四六九 夫木あひかたき花の盛にみつるかなけふいし山の春の月影 為家

四七〇 天木横田山いしかはらのよもきふに秋風寒み都恋しも 長明

四七一 新初また越ぬ相坂山の若清水結はぬ袖をしほる物から 信房

四七二 後拾なま人のかけやは見えん若清水又逢坂の関は越とも 門生

四七三 新拾あふ坂の関のこかけの若清水流て結ふ契ともかな 為明

石垣

同

同

石戸山

同 類多

家光²⁷⁺

伊勢(下りけるにうちも過ていし)か原と云所に

四八四 新後神代より祈まことの験には石戸の山の樹とせとる
四八五 名奇いほと山ゆふしてかけて祈りし樹とせなみとける霜哉

好忠

四八六 夫木 石戸山あまの関守今はとて明る雲ぬに春はきにけり
 四八七 同 あがねこし石戸の山も見えぬへしめもきはめてとてける夏哉
 四八八 同 石戸山あくももしず鳴鹿は尾上の霧に妻やまとへる
 四八九 同 柳とる今も石戸の山かつらふたごひなひやせの諸神
 四九〇 同 石戸山よに有難き冬の夜の天の関守誰かすへけん

磯崎

四九一 万三 磯崎を漕たみゆけは近江の海今の漆にたつてはに鳴
 五十師頼 同 藻塩

四九二 散末集 白妙の花の梢をめでかけていせしの嶺をふりせわつらふ
 四九三 夫木 木のからいせしの嶺や雲しんをれ錦と春の山陰
 四九四 同 もつてのいせしの嶺ふ時雨してまつひまゆみ紅葉しにけり

石良瀬

四九五 散末集 ひとを世を過かたしや思ふ覧いしらが瀬にも綱代打也
 板目山 同 藻塩

磯越道

四九六 散末集 いぬ山いたしやははしも時雨されはまくのまねて色かはり行
 同 藻塩

因幡山

四九七 万三 さいれ波いせせらなるのとせり昔のややくえつ瀬母に
 因幡山 峯 美濃 因州 同 名
 四九八 愚草 これも又たし物を立降りいぬの山の秋の夕ぐれ
 四九九 玉吟 明ぬるか因幡の山の松がねの枕に月の影のかたふく
 五〇〇 千五百 因幡山けはしくもあらぬ松風の雲らぬ月の影はらふ也
 五〇一 夫木 今ほとと春もいぬの嶺の松ぬにあらはれて落馬と鳴

知家 五〇三同 今ほとと因幡の山の郭公わすれかたみし声もかな
 好忠 五〇三同 しばしともなとかとこぬおほの関因幡の山のおほいねとや
 推光 五〇四 御集 因幡山松のあらしや寒からん秋のふもとに衣うつ也
 為家 五〇五 建保 旨むなしくもことし因幡の嶺に生る松をとつてよ春の光に
 好忠 五〇六 同 冬の夜の月は因幡の峯越て猫山の端に松風の声
 五〇七 同 因幡山雪の松風さくくれて村雲しろうく出る夜の月
 五〇八 同 我ならぬ誰ぞとはん立降り因幡の山の松のしし雪
 高市 五〇九 千首 せめてけにそれぞなくさみ起別因幡の山の松はうけいと
 伊吹山 峯 同

俊頼 五二〇 六帖 六 あもきなやいふきの山のさしも草をの思ひに身をこかしつ
 行意 五二一 同 なたごりの伊吹の山のさしも草さしも思はぬことやはあらぬ
 俊頼 五二二 愚草 草しられし霞の下にふれつ君にふさめさしも忍ぶと
 五二三 玉吟 色ふかき伊吹の山の紅葉かなおふらん草はさしもかれし
 五二四 新六 年月はいつる伊吹の嶺に生るさしも思ひのもゆとしらまし
 五二五 建保 木末まで伊吹の山がさしもいかにもえつ秋の色に出らん
 五二六 同 さしもやと身にしむ色も伊吹山はけしうす嶺の秋風
 五二七 同 ひざしさをいかに伊吹のさしも草さしもかれなき秋の夕暮
 五二八 同 袖にみつ嶺の嵐の伊吹山さしも露もる秋のならひに
 五二九 同 春のあらしささ伊吹の山梅花をもくす関の藤河
 五三〇 同 こき捨て風は伊吹の山の端をさそひて出る関の藤河
 五三一 名奇 雪を分ておろす伊吹の山風に駒打なつむ関の藤河
 五三二 千首 伊吹山さしも待つる時鳥あも野が原を安く過ぬる

越前 五三三 千載 今ほしもほに出ぬらん東路の若田の小野のしのを薄
 若田小野 美濃 類名

家隆 五三三 千載 今ほしもほに出ぬらん東路の若田の小野のしのを薄
 若田小野 美濃 類名

朝臣 五三三 千載 今ほしもほに出ぬらん東路の若田の小野のしのを薄
 若田小野 美濃 類名

定家 五三三 千載 今ほしもほに出ぬらん東路の若田の小野のしのを薄
 若田小野 美濃 類名

家隆 五三三 千載 今ほしもほに出ぬらん東路の若田の小野のしのを薄
 若田小野 美濃 類名

純朝 五三三 千載 今ほしもほに出ぬらん東路の若田の小野のしのを薄
 若田小野 美濃 類名

頭昭

国基

後鳥羽

忠足

範宗

行家

康光

為尹

定家

家隆

行家

定衛

俊成

内侍

忠足

範宗

康光

秀能

為尹

伊家

五四 折後知やいかに若田の小野のしの薄思ふ心は穂に出すとも
五五 統後けしめいは老田のとの真蓋原うら枯凌る秋風としく

伊津貫河

同 類き

五二六 拾玉えくく雪降しけは蓬田のいぬき川を先水けり
五二七 千五百幾千代も君がためしやこれならんいぬき川の鶴の毛衣

五二八 夫木君が為鶴のよはひも猫あかていつぬき河に千鳥鳴せ
五二九 同 蓬田のいぬき川に住つもの千年もかけてめでたひあへるかも

五三〇 同 むしろ田の伊津貫川に年もへて波や立らん鶴の毛衣
五三一 夫木蓬田の伊津貫川に立波もみ代かけて田鶴を鳴せ

五三二 備馬兼貫河のやは手枕やはかぬる夜はなきて親くる妻
五三三 御葉蓬草かぬて千年のしるまかない貫川に鶴あそぶせ

大飼御湯 山

信濃 初探名所集三巻重郡

五三四 拾遺鳥の子はまたななからたていぬかひのみゆるはすもり成へし
五三五 夫木葉鷹の羽風に雪は打みたれ朝風寒き大飼の山

伊那郡

同

五三六 春集しなのをいにはあらずかひかぬに積れる雪のとけん程まで
五三七 懐中信濃なるいなりの郡と思ふには誰かたのめの里といふらん

伊倉山

同 藻塩

五三八 懐中忘らる身の浮事やいと山いくしはかりのなげき成覧
五三九 万四千かみつけのいかりの沼のおほぬ草よそにみし夜は今社まで

伊奈良沼

上野 藻塩

五四〇 夫木蓬草はいかりの沼のおほぬ草よそにや恋ん袖はく共

如春 五四二 同 おほぬ草凌はうへに城にけるいなしの沼に晴ぬ五月雨
秋隆 五四三 同 伊香保沼 根 同 藻塩若草郡
為春 五四四 同 伊香保沼 根 同 藻塩若草郡

慈鎮 五四三 同 いはらのそひのはり原ぬもろにぐもむかぬやまかもしおは
具親 五四四 同 かみつけのいかりの沼にうゑなきかく恋んとやたねもとあけん

寂念 五四五 同 いはせよなかくしけに思ひとらうきとそしつと忘せぬしも
不人 五四六 同 いはねに神なりそね我ははゆゑほげけしとも子らによりてそ

顕昭 五四七 同 万四千いほ風吹日さぬ日ありといへともか恋のみし時なかりり
為家 五四八 同 かみつけのいかりの沼にうゑなきの行過かてぬ妹か家のあたり

後院 五四九 同 いはらのそひのはり原我衣につきよらしもまたと思へは
五五〇 六帖かくれなくあはずなりな陸奥のいかりの沼の我がせん

五五一 建保こなき植しいはらの沼のあやめ草かかき種まほ誰木めけん
五五二 堀百東路のいかりの沼の杜若袖のつまより色とにみゆ

俊光 五五三 萬草から衣かきるいかりの沼水にけしは玉ぬくあやめとぞ引
五五四 玉吟五月雨にいはほの沼のあやめ草けしは五月と誰かひく覧

五五五 夫木五月雨は伊香保の沼のあやめ草かか入みみに朽やはてなん
五五六 同 蛙なくいかりの沼にすむ螢もゆる思ひに昔もそめあらず

重之 五五七 同 ちかふしにさえたる雲のかくれはいはほのぬらに雪を降らし
五五八 建保いかりの沼に五月雨に沼の若かき波もこすらん

309 五五九 同 かけくらくといはほの沼は夏草下の露のみさには用やとれる
五六〇 同 思ふ事あやめの草の長き根にいはほの沼のいけて残らん

五六一 同 いは垣もみもり深く成ぬ覧いかりの沼の五月雨の比
五六二 同 おりたてて引手に夏はななきの葉のいかりの沼のいかり涼しき

無名 五六三 同 水鳥の玉藻の床やしほらんいかりの沼の夕立の空
順徳院

康光 五六四 同 水鳥の玉藻の床やしほらんいかりの沼の夕立の空

定春 五六五 同 水鳥の玉藻の床やしほらんいかりの沼の夕立の空

行意 五六六 同 水鳥の玉藻の床やしほらんいかりの沼の夕立の空

赤人 五六七 同 水鳥の玉藻の床やしほらんいかりの沼の夕立の空

同 五六八 同 水鳥の玉藻の床やしほらんいかりの沼の夕立の空

同 五六九 同 水鳥の玉藻の床やしほらんいかりの沼の夕立の空

同 五六〇 同 水鳥の玉藻の床やしほらんいかりの沼の夕立の空

同 五六一 同 水鳥の玉藻の床やしほらんいかりの沼の夕立の空

同 五六二 同 水鳥の玉藻の床やしほらんいかりの沼の夕立の空

同 五六三 同 水鳥の玉藻の床やしほらんいかりの沼の夕立の空

同 五六四 同 水鳥の玉藻の床やしほらんいかりの沼の夕立の空

石垣沼 同 類考

五六四 万十一青山の若き沼の水隠に恋や渡らんぬふよしをなみ
 五六五 堀戸風吹は若垣沼の杜若波のおるいぞませたりける
 五六六 夫木かりうしの岩垣沼のかくれにはうしてしゆともなわれは出し
 五六七 同 かくたに岩垣沼のみまつくしる人なみにくつる袖哉
 五六八 御集あやめ草岩垣沼のぬをたえずけしけは袂の匂ひとそなる
 五六九 題林おく山岩垣沼の志水思ひにわれは袖とぬけける
 五七〇 秋集名もわらず石垣沼に引すて五月待へき草葉ならぬは
 五七一 千首所せき石垣沼はとりてもおなじ空なる秋の夜の月

磐手 杜岡閨里山 陸奥

五七二 六帖磐手山はてなからの身の果は思ひしこしく誰かつけまし
 五七三 名舞忍び音の色のみ深き袖なれやいはての杜の秋の村雨
 五七四 同 山ふきはいはての里の春よりやくらなれし色の花に染けん
 五七五 類聚人あもる磐手の関はかたけれと恋しき事はとまらざりけり
 五七六 同 人しれす袖の浦には浪かけていはての関に日教へにけん
 五七七 夫木くらなれし色とよみゆる陸奥のいはての里の山吹の花
 五七八 同 来てみればくらなれし色に咲けりいはての里の山吹の花
 五七九 同 思ひ事いほくの森の郭公つおには声の色に出けり
 五八〇 同 色見え思ふ心は年々おぬいはての山の楨の下露
 五八一 同 とここのはての岡の若し紅紫あめ我衣手に
 五八二 同 陸奥にありてや関のいはて思ふ心のおくと誰か知へき
 五八三 同 とし月はいはての松の下紅葉色に出てや今は恋しき
 五八四 同 いはや磐手の杜の炸原へたる霧は立ものくやと
 五八五 同 しはしともいはての杜の紅葉は色に出てそく人とめけれ

人丸	五六六 同	陸奥の磐手の杜のいはてのみ思ひとくる人もあらん	不説人
国信	五八七 同	東路やいはての関のかみもなく春とはつくる陸奥の声	定家
貴之	五八八 題林	くりかへしさのみもいかに恨へつきいはての杜のしめ縄	為氏
内親王	五六七 同	かくたに岩垣沼のみまつくしる人なみにくつる袖哉	好忠
後鳥羽	五六八 同	御集あやめ草岩垣沼のぬをたえずけしけは袂の匂ひとそなる	不説人
兼氏	五六九 同	題林おく山岩垣沼の志水思ひにわれは袖とぬけける	衣笠
走表	五七〇 同	秋集名もわらず石垣沼に引すて五月待へき草葉ならぬは	忠房
為尹	五七一 同	千首所せき石垣沼はとりてもおなじ空なる秋の夜の月	光俊
市師原	五九一 同	六帖陸奥のいちしの原のいちしるく我とあみして今しるるな	衣笠
陸奥	五九二 同	堀百冬さぬと關つるかにいらしるく市師の原に降る初雪	忠房
藻塩	五九三 同	新六いたらに逢まよなみ陸奥のいちしめ花の春にはきけとも	不説人
同	五九四 同	類聚風よくいはての渡空暗であふくま川にすめる月影	光俊
同	五九五 同	夫木陸奥にちかき出羽のいたしきの山に年ふる我ぞ侘しき	不説人
同	五九六 同	伊津波多 坂山 越前 類考	不説人
同	五九七 同	後撰君さのみいはたと思越なれは往來の道ははるけかしを	家持
同	五九八 同	統後歸る山いはた秋と思し雲あろ雁も今やあひみん	不説人
同	五九九 同	新古 志なん世にもしらの帰山いはた人にあけんとならむ	家隆
同	六〇〇 同	夫木かきくらしのわた道降雪にいはた山を思ひくやけれ	伊勢

色浜

同 八雲御抄

伊弉考神

同

六〇一 表葉せらうららの色浜とは成ぬ共浪のかしかならんとすらん

伊勢

六二七 五十六ののれ神さび青雲の櫛引日すらしとせよほゆる

無名

六〇二 山葉集しほせむるますとの貝拾ふと色浜とはいふにや有覧

西行

六二八 同 けちの神の麓にけしもある處の臥波波の衣きて

無名

六〇三 名寄降雪の色浜の白妙にせれとも分ぬ村千鳥かな

中務

角つなぎし

越中

勅撰名所集 土着臣 紀伊有間名

無名

六〇四 夫木山ふくしに紅葉散しく色の浜冬は越路にともりさみしな

重政

六二九 万廿いその浦にうらまきすむ鴉鳥のおきあめ身は若かまに

清丸

岩瀬渡

能登 八雲御抄

射水河

同

和名 若國射水郡

六〇五 名寄舟とむる岩瀬の渡小夜更て宮崎山と出る月かけ

不知

六三〇 五十七 いみつ河いゆきめくける玉とけし上山は春花の

家持

六〇六 夫木あまそきに雪降つある船をみて渡りかたきははせ成けり

同

六三二 同 いみつ川漆のすとり朝なまにたにあさりし塩みては

同

六〇七 同 風葉冬は岩瀬の渡りこそ遠の船まをともりなき

基広

六三三 同 射水河清き河内に立立てわたりたみればあゆの風

同

六〇八 同 五月雨は岩瀬の渡り浪越て宮崎山に雲せかされる

勝是也

六三三 同 いみ川雪消満て行水かはやましはのみたつがなく

同

伊え理森

越中 八雲御抄

生野

丹後

類寺 天田郡

六〇九 万十七 妹や家にいくりの杜の藤花今も春もつねかしみん

知表

六三四 同十九 朝来まきははるけいみつ河朝清つこた少舟入

無名

六一〇 名寄いつたにくりの杜の春なくんあかぬ藤の花をみ捨て

顯季

六三五 家集別にしほとに濛にし玉しぬのははしいくの野へ宿れる

元真

六一一 時鳥声あがなくに尋きていくりの杜にいくよぬ覧

無名

六三六 同 卯花の吹を垣ねは布さらす生野の里の心とこそすれ

顯仲

石勢野

同 和名 新川郡

生野

丹後

類寺 天田郡

六一二 万九 いはせ野に馬たき行て遠近に鳥をみたてて白ぬりの

無名

六三七 同 拾玉草枕いよく生野に今夜又君ゆへなして結ふきかは

慈円

六一三 同 石勢野に秋萩しのみ馬なめて拍鷹狩由にせてや別ん

同

六三八 同 名寄駒なめて生野の奥の八里もみゆる烟やしうし成覧

侍徒

六一四 堀白ぬりの鈴もゆるらに石勢野にのほせてみるましく山のたか

顯季

六三九 同 五百里遠みいくの末をみ渡せば霞にかへす春の小山田

雅經

六一五 夫木しめてそ猫かりゆかめいせの萩のかりしほ露来くとも

源政院

六四〇 同 大江山いせき生野の道にしてとをきたら山時鳥かな

小侍従

伊頭野山

同 兼盛

生野

丹後

類寺 天田郡

六一六 万九 わがこたしのはくしらに女規いつへ山の鳴かぬゆらん

無名

六四一 同 おしめとも秋はいく野の花薄まねねはかへれくすのうら風

安芸

六一七 万九 わがこたしのはくしらに女規いつへ山の鳴かぬゆらん

無名

六四二 同 いつくまでけい生野の道なしんえそ白菅の草枕かな

季経

六三五 御集 草枕夜半の夜は大江山いくのう月にさほしかの声

六三六 同 志るなよ月に生野の道すから袖にほれたる女郎花哉

六三七 山家集 錦玉は生野へこゆるからひつにおさめて秋は行にや有覧

六三八 建保 大江山行を涼しき袂かな生野の末に秋やきぬらん

六三九 同 大江山月もいく野の末遠みたまゆら待す明る空哉

六四〇 同 夏草のしけみの露は大江山こえて生野の末もとをこに

六四一 才基 さらばな生野の道の時鳥たゝ声のすさみ成とも

六四二 同 くれぬとていそぎ生野の道にしてまぬく尾花の隙も無まて

六四三 同 霜寒る生野の道の女郎花秋みし色は夢かうつつか

六四四 同 大江山しくらゝ雲の末みれば生野も遠き今朝の初雪

稲村 山岡 丹波 兼塩

六四五 兼塩 君が代はいけの里もさしなへてゐる村の岡と成にける哉

六四六 夫木 君が代のなりもしき年のいぬなれば稲村岡にみちてとどめ

六四七 同 かく斗ゆたけき年に稲村の山田守をば又もあひさきや

磐坂山 同 類考

六四八 統古 岩坂の山の岩根のうきなきとききはかきは音のむす哉

六四九 夫木 都にもうす紅葉せり岩坂や山の末末は今かてむらん

六五〇 同 鶴のすむ岩坂山の姫小松千代の気色のしるくも有哉

岩根山 村 同 名寄当国

六五二 名寄 ときはなるいはぬの山の時鳥つれなかれと待ね夕を

六五三 同 我君に仕へまつらん若蓮 岩根の村の方代までに

伊祢浦 丹後

六五三 名寄 わかちるまさの入海霞ぬと海士は告よぬの浦風

西行 泉村 丹後 兼塩

行意 家隆 入佐山 原 但馬 類考

六五四 兼塩 白菊のいつみの村に住人はくろかみながら年を社ふれ

越前 六五五 六帖 我せこか入さの山の山あしりきてなとりふれさかもまでるに

前斎 六五六 補塞 里わかぬ影をほみれと行月の入さの山を誰か尋ぬる

家隆 六五七 花巻 梓弓いるさの山にまともふらほのみし月の影やみゆると

資兼 六五八 愚草 妹と我と入佐の山は名のみして月をぞしたる在明の空

六五九 玉吟 梓弓春のやよびも年月の入さの山は花も残らず

六六〇 同 時鳥鳴て入佐の山の端にまた影とめぬ夕月夜哉

六六一 夫木 梓弓をしても花と類みつへさの山にがふる白雲

六六二 同 歸も雁声もなたて梓弓いるさの山の雲の遠方 丸自院 370

正妻 六六三 同 月影の入佐の山の時鳥あふきをあぐる人や聞覧 為家

資走 六六四 同 夕つく日入さの山にときまれおかりかへ鳴郭公かな 俣丸茶

巨屠 六六五 同 梓弓春の目くらし引つて入さの原にまともをぞする 経家

具代 六六六 方集 秋もかき程そしらる夕附日入佐の山の松風の声 類考

不説人 伊津師宮 里 同 重之

六六七 新松 千早 振いし宮の神の駒人なりのりそやたりもぞする 不説人

六六八 名寄 但馬 なるいつしの里のいつしかと恋しき人をみてはくさまん 不説人

行能 因幡河 因幡 夫木 当国

六六九 六帖 二いばは川いなとしつおにいひはては流てせにもすましと思ふ 不説人

式部 六六九 六帖 二いばは川いなとしつおにいひはては流てせにもすましと思ふ 不説人

因幡山 峯

同

因幡山美濃国西筑前守目統
親有後醍醐天皇御時探名所
集類卷之五美濃二初定作人不知
歌フカテ西田立件ル

六七〇 濛濛昨日も秋の田面に露置しいなほの山の松の白雪

定表

六八七 夫木 川も河ふるさのみなとを尋ねればはるかにつたふわか浦なみ寂然

中務

六七二 同 秋の田になみきし程は枯はてみめらぬ因幡の嶺の松風

行意

六八八 同 出雲川恋のみくの敷さへにみえこそ渡れよはの月影

六七三 同 雪ふかく因幡の山の峯の松香やみどりの色に帰覧

定衡

六八九 家集 河上のいつもの浦のいつもくまませ我せ絶す待はた

赤人

六七四 同 年暮て因幡の山の嶺の松まつとは知や又帰りん

映傳

六九〇 玉吟 類みこし八雲の道も絶果ぬ君もつものうらわしのまや

赤陸

六七五 同 ふり捨て我はいなほの山の端の松は独や雪にしほれん

如表

六九一 夫木 神のます出雲の浦にやく塩の煙ややかに八雲なる覧

兼光

六七六 玉吟 秋の田のいなほの峯に吹風の身にしむちは冬の暮まで

赤陸

六九二 同 いかにして娘捨山の月よりも出雲の浦に照増らん

誠人

六七七 夫木 走も鳴て因幡の嶺にけし待かめれや山郭公

有表

六九三 万二角さばいほみの海のことさへく辛の崎なるくりにぞ

人丸

六七八 御集 松風になみ比まなめてや来も因幡の嶺にし雪

羽院

六九四 同 石見の海つ浦わも浦無と人と見らぬ海無と

同

六七九 同 時鳥まつし人や告つらんいなほの山の嶺に鳴なり

同

六九五 類聚 角さばいほみの海のみかみるの深きうしみはほす袖ぞなき

兼光

七八〇 同 けしむりや山を震の立はなれ因幡の嶺の夏の曙

同

六九六 兼集 石見野や春の唐ちる花盛高角山に風や吹覧

兼光

七八一 同 天の戸やあけは因幡の嶺にしも待夜な更も秋のよの月

同

六九七 兼集 石見野や夕越くれてみ渡せば高角山に月ぞいでよし

兼光

七八二 千首 風吹みぬの霞の立別いなほの山か松を見え行

為予

六九八 万二けふくと我待君はいし河の貝にましりて有といはすやも

兼光

出雲社 宮

出雲

六八三 攝後 千早振いつもの杜はみほすへてねきぞかけける紅葉七しすな

仲実

六九九 同 なにあはさあひもかぬてん石川に雲立渡れみく忍はん

兼光

六八四 拾玉 石はかなり幾代か雲にけれね覧出雲の宮の千木のかたぞき

為鎮

七〇〇 夫木 石河のつが昔も尋しを哀とや見し住吉の神

為鎮

出雲山

同

六八五 兼集 しまつらつもの山のとまはなる命かあやな恋つゝあらん兼持

兼持

六八六 夫木 出雲山よみの月のさやけきは雪の朝の心とこそすれ

兼経

出雲河

出雲

39+

石見に侍りてなくなり侍るへき時にのそめて

妹山

石見 類き

40+

出雲のさきさの宮にすして出雲川の辺にて

六八七 夫木 川も河ふるさのみなとを尋ねればはるかにつたふわか浦なみ寂然

六八八 同 出雲川恋のみくの敷さへにみえこそ渡れよはの月影

出雲浦

同

六八九 家集 河上のいつもの浦のいつもくまませ我せ絶す待はた

六九〇 玉吟 類みこし八雲の道も絶果ぬ君もつものうらわしのまや

六九一 夫木 神のます出雲の浦にやく塩の煙ややかに八雲なる覧

六九二 同 いかにして娘捨山の月よりも出雲の浦に照増らん

石見海

石見

六九三 万二角さばいほみの海のことさへく辛の崎なるくりにぞ

六九四 同 石見の海つ浦わも浦無と人と見らぬ海無と

六九五 類聚 角さばいほみの海のみかみるの深きうしみはほす袖ぞなき

六九六 兼集 石見野や春の唐ちる花盛高角山に風や吹覧

六九七 兼集 石見野や夕越くれてみ渡せば高角山に月ぞいでよし

石見野

同

六九八 万二けふくと我待君はいし河の貝にましりて有といはすやも

六九九 同 なにあはさあひもかぬてん石川に雲立渡れみく忍はん

七〇〇 夫木 石河のつが昔も尋しを哀とや見し住吉の神

石河

同

七〇一 兼集 しまつらつもの山のとまはなる命かあやな恋つゝあらん兼持

七〇二 夫木 出雲山よみの月のさやけきは雪の朝の心とこそすれ

妹山

石見 類き

石見瀨

同

七〇一 拾遺いも山の岩根にもける我まかも知すて妹か待つあらん

人丸

七二九 同 いなみ野にむし〜みよし相木の葉広にかなれる夏ほきはり重之

七〇二 堀百石見瀨もたが磯にも浪のくたけて帰る物としらすや

俊頼

七二〇 名寄いなみ川石の中なる石ふしのうをの敷とて音ぞするもの

七〇三 六音書いほ瀨もひろの底もたふれば浅き瀬になる身の恨哉

寂蓮

七二一 同 名に高きいなみの海の沖つ波もへにかくいぬ大和嶋は

七〇四 名寄身のうさまかくと誰は石見瀨思ひたを波音哉

円明

七二二 同 名に高きいなみの海の沖つ波もへにかくいぬ大和嶋は

七〇五 同 身の種はいはてと思ふ石見瀨何もうらみて千鳥鳴覽

萬鏡

七二三 懐中いしおも思ふあたりへ印南嶋もよみ斗そ舟とむむへき

七〇六 拾玉石見瀨いふにかひなき世中のつらきに絶ぬみや成らん

同

七二四 夫木いなみの草のしげみにみゆる火鹿の立ともし成覽

石見河

同

七〇七 新勅朝毎に石見の河のみを絶す恋しき人へあひみてし哉

同

七二五 同 逢事をいなみ野に咲女郎花おらぬ物ゆへ袖そ露けき

伊世雄鴻

同

七〇八 夫木いせる鴻煙も波もつらからすせれにも秋の色しみえねは

為家

七二六 同 播磨瀨いなみの野への村薄むら〜する波かそ見る

活道

播磨 藻塩

七〇九 長歌いくら山木立の繁に咲花も移ひにけり世中は

無名

七二七 同 印南野や野中の清水結ふ手玉ゆし涼しさのかり露

七一〇 同 ほしきかも御子のみくしの有通ひみし活道の道はあれにけり

同

七二八 同 いなみ野にかりする鹿は草深みむつきはみえてゆきのかすゆゆ

印南 鳴瀬 海

同 類考

七一一 万三いなみ野も行遊かてに思ふけは恋しきかの嶋みゆ

人丸

七二九 同 年へも思ひいつやといなみのふるさきし水に音をせとふ

印南 鳴瀬 海

同 類考

七一二 同 六印南野の浅きまをなみさぬ夜にけなかくあれば羨し思はる

赤人

七三〇 同 印南野の花の葉もに移行なめめの木は沖つしら浪

七一三 同 七家にし我は恋なんいなみの浅きまへに照し月よを

無名

七三一 同 明石鴛うらもの波をへたくも又袖ぬらすいなみの露

七一四 同 丸もくれぬて我はや恋んいなみ野の秋我みつういなん子ゆへに

大夫

七三二 同 くるる夜をかきり成けるいなみのよも分る道の果もみえねは

七一五 同 十二明日よりいなみの川の出でいかなはときれる我は恋つあしん

無名

七三三 万五いなみ嶋は名にそ有けれ海原をあか恋さる妹にあらなくに

七一六 同 十五吾妹が形みに見んをいみつま白浪高みまよにかもみん

無名

七三四 同 五家の嶋荒磯の上に打なみさしに生たるなのりそか

生嶋

播磨 藻塩

七一七 同 廿印南野のあぢかおしは時はあはれと若きあかも時ほつねなし

安重主

七三五 玉吟明ぬとや浦の家嶋なく千鳥また天や月そさしける

七一八 同 兼集いなみの秋の尾花は招けとも女郎花にそ心つきぬる

表持

七三六 夫木朝夕に定なき世を歎くにはいさ嶋にこそ住へかりけれ

揖保湊 茨石山 同 和名三当国揖保郡

七三九 名奇誰もそや物はかなしき及千鳥いはの湊に鳴てくくなり

七四〇 同 もしは焼いはの茨舟もま朽て波路晴せぬ五月雨の空

七四一 同 しづまに鴨の声こそ聞ゆなれいはの泊に鶴や鳴らん

七四二 同 過行と思ふに物のかなしきはいは山なりと聞にならへし

七四三 天木明かたは塩ひもさしし雲うすむいはの湊の秋の夜の月

出崎 同

七四四 折六はりま端いは崎めぐら暮の舟子の声も哀なりけり

弥高嶺 同 夫木ニ当国

七四五 夫木細石の巖となれははりまなる弥高の嶺いや高になら

彌高山 楠中 類多 近江守同名

七四六 全冬雪れはいや高山の梢にはまた冬ながら花咲にけり

窟山 同 類多

七四七 千種揃うきなく千世そ祈るいはや山取樹葉の色かへすして

七四八 斯初出緑玉松か枝の千代までも窟の山を動かさるへき

七四九 名奇神代よりあめのまとしての動きなき験にたてる窟山かな

稻井 同 類多

七五〇 金買苗代の水はいなゐに任せたり民やすけりなる君か御代かな

石崎 楠中 類多

七五一 続徒末遠き千世のかけこそ久しけれまた二葉なるいは崎の松

板倉橋 同 菟垣当国 和名買飛郡

七五二 堀百いたくらの橋とは誰も渡水ともいふはせ鳥と過かてにする

稲総山 同 名奇三当国或近江

七五三 名奇長閑なる天か下かないふさの山田に田子の早苗取けり

七五四 夫木つくる田のかるき君か御代なれば稲ふさ山のゆたかせけり

伊津美井 同 菟垣

七五五 夫木国こほり今そさかへんいみの君か御代には絶しと思へは

石倉村 同 菟垣

七五六 夫木うたふらし世をさざまれと石倉の村の諸人もり若にして

龍嶋 安芸 菟垣

七五七 懐中あたならん人にはみせしづく鳥波のねれ衣させん物かは

祝嶋 周防 勅撰名所集 菟垣当国

七五八 十五家人は帰りほこしはひ鳥祝ひまらん旅行我を

七五九 同 草枕旅行人とはひ鳥幾代ふるまで祝ひきにいけん

七六〇 夫木君か代を幾万世とすむ鶴は祝嶋よりいはひ来らし

磐国山 周防 八雲御抄并菟垣当国 和名三政河郡

七六一 万四周防なる若国山を越ん日は手向よくせよあしきそりみち

七六二 名奇あふ事君にぞかたき手向して若国山は七日越とも

七六三 同 若国うあら山道は猫遠しけれもそかきうあゆめ無駒

七六四 夫木手向せし若国山の嶺よりも猫さかきしは此世なりけり

七六五 同 うきなき若国山に松木引民の教さふ世にも有哉

公史

茂右

兼隆

隆教

孰人 不知

定嗣

無名

同

定嗣

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

七六六 同 岩国の山のあし道手向してゆるけふし空の時雨る

磐代 岡森

紀伊 類考 日高郡

七六七 万一君代も我世もしや岩代の岡のむねをいさ結ひてん

七六八 同 岩代の浜松かえも引結びまきくあらは又帰りみん

七六九 同 岩代の岸の松の枝結びけん人ほ帰りて又見けんかも

七七〇 同 七事痛はかくせんを岩代の野への下草我し列ては

七七一 兼集岩代の野中の松を引結び命しあらは帰りきてみよ

七七二 堀百見をらに心もとけす岩代の松も誰か結び置けん

七七三 同 末の世の人見ともや岩代の野中の松を結び置けん

七七四 同 世中は常にやはある岩代の尾下たる松をみるにも

七七五 六百番ながらむすほららん君はよも哀とたにも岩代の松

七七六 山家兼岩代の松風まけは物と思ふ人も心はむすほれけん

七七七 拾玉千代ふともけてやまん結のつる身の浮事は岩代の松

七七八 同 思へともかくとも我は岩代の松もかひある初雪の度

七七九 同 恋しともまた岩代の結ひ松とけぬ思ひを知人となさき

七八〇 十五結ひまきく霜とはいさや岩代の浜松が枝にすめる月影

七八一 同 岩代の野への下草吹風にむすほれたる松虫の声

七八二 同 身のりさほてつれなきにしらふれとむすほれても岩代の松

七八三 類聚さく竹のいくも霜が岩代の岡の草ねに結び置らん

七八四 名寄岩代の野中の清水むすへとも恋をほけたぬ物にそ有ける

七八五 月積さきの世にかなる種を結びけんうしも今は岩代の松

七八六 愚草岩代の野中さえ行松風に結びそへたる秋のはつ風

七八七 同 言の葉に結ひ契は見えぬれとためとく岩代の松

七八八 夫木岩代の野中たたる村薄松ふく風にむすほれつ

鎌倉

磯麻 浦

紀伊 類考

七八九 万九紅葉の過行ふらとたつさびてあせむしそまれば悲しも

七九〇 同 五月よみの尤も清み神嶋の磯まの浦に船出すし帆は

七九一 建保神嶋や磯麻の浦に婁のふるもにすむ虫の身を根つ

七九二 同 神嶋のいせまの浦に舟出して沖つ塩みて帰りこんとは

七九三 同 まへなき磯麻の浦のいせ波になれてもねる葦の袖哉

七九四 同 忘や磯まの波のうらみそそ神嶋にかけし契は

七九五 同 かもめなる磯まの浦の夕浪に誰面影をうけて待覧

七九六 同 かりりける契結小の神嶋や磯まの浦のうらめしのまや

七九七 玉吟夕浪のかけてそ恋る神嶋の磯麻の浦に衣かたしき

七九八 千五百夕かけてつまや恋しき神嶋の磯まの浦に千鳥しは鳴

七九九 夫木いたつに磯麻の浦のつせ貝あはてや波の下にしつまん

八〇〇 同 いおせんいせまの浦にやく塩も浦にはしなき烟たせり

八〇一 同 神嶋の磯麻の浦に貝の身は徒に成はてぬはた

八〇二 玉計来うきねする磯まの浦のさ夜千鳥友呼かほす声聞ゆ也

頭照

磐手里

同

類考 奥州寄同名

雅経 通尤^{45b} 八〇三 玉葉思ふ事いかに忍びし誰せよりいはての里と名を留む覧見

良基 八〇四 新説古口なしのいはての里は山吹の花咲よりや名付初けん

経来 八〇五 新初みぬ人にかたからん口なしのいはての里の山吹の花

俊兼極 八〇六 夫木咲ぬとは若手の里のいはねともよそよそしく匂ふ梅かえ

定家

妹背山 河

紀伊 類考

八〇七 万四もくれめて恋つあくるすほきの国のいせの山にあらし物き

八〇八 同 七麻夜きればなつし紀の国の妹背の山に麻まけ吾妹

八〇九 同 おほなむもすくなく女神の作れりし妹せの山を見ろそうれしき

順徳院

金村

八〇九 同 おほなむもすくなく女神の作れりし妹せの山を見ろそうれしき

八〇九 同 おほなむもすくなく女神の作れりし妹せの山を見ろそうれしき

八〇九 同 おほなむもすくなく女神の作れりし妹せの山を見ろそうれしき

八〇九 同 おほなむもすくなく女神の作れりし妹せの山を見ろそうれしき

46+

八二〇同 吾妹子に我こみゆけはともしくもならむとるも妹せのやま

無名 八二九古昔いも嶋荒磯による浮みるのつきをともみるは見おにまざり

頭昭

八二二同 人なほ親の最變子や朝まよひきの川つしの妹とせの山

同 八三〇類聚妹買嶋かたみの浦の藻河舟よる(も見えず浪のかは

俊頼

八二二 衆来み吉野の山の下風来かりし妹背の河も浪高みゆ

伊勢 八三二名舟八月のかたみの浦朝あけに出かほりたる妹買嶋船

頭昭

八二二同 ぢみてもまとはれたるか行帰れいもせの山遠近の道

元輔 八三二一抄藻かり船興漕くし妹か嶋かたみの浦にたつかけるみゆ

四条

八二四藤巻 妹背山ふかき道まは尋ずてきたえの橋にふみまといける

八三三藤川 妹か嶋かたみの月の有明に波こけめ雲な(たてそ

西行

八二五同 まよひりも道まはしとて妹せ山たといくそ誰もふみ見し

八三四夫木 明るとた(も鳴らん妹か嶋かたみの浦に残る月影

兼輔

八二六拾玉 妹せ山霞の袖を引かけていはてとみする春のさねとは

同 八三五六帖 いは田河いそささくゆら川の下は雨れて思し比かな

兼輔

八二七同 人しれず尋てて行妹せ川こみ渡るへきはしは有やと

同 八三六名舟 若田河幾合川の暮合て百瀬なる習なる覽

兼輔

八二八名舟 いせ山細谷川を帯にして霞の衣今朝やきるらん

清輔 八三七同 君を我思ふ心と若田河若かき洲の瀬にかほらまで

兼輔

八二九夫木 春くれはす野の梅のうつりに妹せの山は無名立見

後光永 八三八愚草染し秋を暮ぬと誰か若田河また波ゆる山姫の袖

兼輔

八三〇同 暁をなれりしとや別る覽妹背の山の春の雁金

輔規 八三九御集 若田川谷の雲間にむら消てとむる駒の声もほのかに

兼輔

八三二同 むすしきおなじつきの妹せ山紅葉の色もわかすそ有ける

長能 八四〇夫木 渡る瀬も春はせかれて若田川花こぞたあ波のしからみ

兼輔

八三三同 遠近の花もみるへくもせ山霞の衣立な(たてそ

伊綱 八四一者 奇松おねの岩根の岸の夕涼み君あられなくともほゆる哉

兼輔

八三四同 妹背山中に生たる玉まのよの(たてそそ露けき

行春 右熊野(参て若根と云所にて読て京(つかけしける

兼輔

妹山

紀伊

八三七万七せの山に道にむかへる妹の山事ゆるすやも打橋わたす

藤原 八四二万七 海神の手にまきたる玉ゆへに磯の浦りにあさりするかも

無名

伊那滝

同 夫木重因

八二八夫木 誰ゆへもなだたるらんい滝にせくる浪ふたつひき身を

美伊 八四三同 いそ浦にまよる白波降りつ過かておれはまししたゆたへ

俊頼

妹買嶋

同 類ま

八四四夫木 卯尻のころほひなれや磯の浦にたしき浪のおると思は

俊頼

八四六同 秋の日の磯の浦りの海士人は菊味道に塩やむらん

兼輔

磯浦

紀伊

八四四夫木 卯尻のころほひなれや磯の浦にたしき浪のおると思は

兼輔

八四六同 秋の日の磯の浦りの海士人は菊味道に塩やむらん

兼輔

八四七同 磯の浦に夕塩みては小船ですのる藻の海士も今帰る也

兼輔

八四七同 磯の浦に夕塩みては小船ですのる藻の海士も今帰る也

兼輔

今来 山嶺岡 同 藻塩

八四八 万丸妹らかりいまきの嶺に茂たてる妻まつ木は古人みけん
八四九 同十藤浪のちらまくしし時鳥いまきの山を鳴てゆゆ也

八五〇 名奇誰とも今来の嶺といひ置て葦松の木の年をもね覽
八五一 同 都出ていまきの岡の郭公人伝はして初音聞つる

八五二 丈夫五月雨にいまきの岡の時鳥しとこにぬれて鳴渡る也
八五三 同 時鳥今まきの岡の春は五月なれともめつしきかな

八五四 同 つゆよりもめつしきかな時鳥今来の山のけふの初声

糸麿山 里浜 同 類字

八五五 万七足代過ていまきの山の梅花もすもあらなん帰りくらまで
八五六 山麿糸か山時雨に色を染せてかつしをれる錦成けり

八五七 名奇五月雨は糸か山の時鳥くろくしとすらしさす隙なみ
八五八 丈夫木糸麿山谷の氷のとりとらほまたほころひお花はあらしな

八五九 同 春くれは糸か山の山桜風にみたれて花を散ける
八六〇 同 青柳のなびく糸麿の山桜やこまます錦成覽

八六一 同 青柳の糸か山の梅花みやの外に錦もぞ見る
八六二 同 夏引の糸麿の山の時鳥くろくし色にまたれて鳴

八六三 同 深してて五やよすし夏引の糸か山の松の下風
八六四 同 立田壱糸か山の紅葉をいかにぞむればむらこ成覽

八六五 同 おしめとも糸か山の紅葉の心よほくも風にもろかな

石不利河 紀伊 異本石不利河何

八六六 丈夫み熊野や石ふり河のはやくよりぬかひをもつ社也けり

伊予高嶺 伊予 八雲御抄并

人丸 八六七 万三嶋山のよろしき国としき伊予の高根のいご庭の
八六八 名奇道遠きいよの高根を尋ても人の行を我に知せよ

持察 八六九 万三いで庭の岡に立てうたふ思ひい思ひせしめゆの上の
三糸 同 射狭庭岡 同 仙貫抄並四

顯季 伊予湯 同 八雲御抄
顯仲 八七〇 万三みゆの上の木村をみれば臣木も生つきにけり鳴鳥の

成仲 八七一 蕪芸いよの湯のゆけたはくさ知すか今すまます君はしるらん
八七二 花葉伊予の湯のゆけたの教は左八右は九つなかな十六

西行 棟津 同 藻塩或歌枕美藻
仲正 八七四 万三すなへゆめせ子ともいもみ津の松橋よりんさにあむさん 意丸

鎌倉 石城嶋 浜 伊予 和名手和郡
具氏 八七五 名奇伊予の海の岩城の嶋は我なれやあふ事かたき塩のみせやく

為家 八七六 同 かにしていが成世にかははたれし岩城の珠の海士のさ衣
兼昌 八七七 新六つれなさはいはさの染のしも浪のなにと心をかけはしめけん

文昭 衣笠
快玄 石路河 筑前 藻塩
入道 八七八 名奇うみ山を多越くれは三笠なまはいふみりに駒なつむなり

忠盛 怡土浜 嶋 同 藻塩三首同和名持土郡
八七九 六帖下紐のゆふされがけてときつれば若かみせぬふいと鳴みゆ

人丸 赤人 大洞院 八九〇

赤人 八九〇

八八〇名舟ついでに綱引くる程に風吹はいとの浜にせ船もよりける

生松原

同 類享

八八一 家集哀なれかくのみつねに思ひついきの松原いききたるよ

八八二 同 老ぬとも猶行さきの祈らるる千年までも生松原

八八三 堀後志して生松原いきたりとつけたにやらぬ道のほろけさ

八八四 同 枝毎にいくその千世を契らんと神代よりいきの松原

八八五 六百番尋てもあはすはうやまきりなん心づくしいきの松原

八八六 拾玉ざりとも頼む心も深みとりけふ行末はいきの松原

八八七 家集あはしむにいきの松とはきなから心づくしの中を悲しき

八八八 名舟けふまては生の松原いきたれと我身のうに歌てせふる

石田野

老岐

仙見抄二書
和名石田郡

八八九 千五石田野に宿りする君家人のいつしと我をといかにいはん

妹買閑

未勸

八九〇 新大これや此もさまたけの妹買閑思ひ出すはたせ過まし

去来見池

同

八九一 六帖すにぬればいきみの池にまがれ鳥てにとる斗なりける哉

出入河社

同

八九二 万七妹の門出入の川の瀬をばやみ我馬まてくふらししも

八九三 新六神よかにいもいと頼へまはかなやいさの出入の森

石迎山 里

同

八九四 万才一白真子いせへの山のときなる命ならはヤ志つとまらん

八九五 玉吟白真らいでへの山のいとなく浪にぬるれと引人もなし

八九六 新六浪ぐるいせへの山のまつ虫はねにあはれて声恨なり

八九七 夫木しらまろいせへの山の秋風にたなびく雨や木葉成覽

八九八 新妻山路よりいせへの里にけふはきてうらめしき故衣哉

入野

同

古本近江上云説了然共
古本近江上云説了然共

小町

中務

頭仲

常陸

頭昭

慈鎮

俊成

清房

無名

知家

伊嗣

不知

無名

忠房

寂達

後兼極

同

定家

定家

各隆

徳太子

羽成鳥

具親

入日岡 嶺

未勸

九〇九 紙古著鷹のすゝのし原狩くれて入日の岡に雉子鳴也

九一〇 玉葉時雨つる程よりも猫色こきは移る入日の岡の紅葉

九一一 日本紀あかねさす入日の嶺の影もしてこしを染たる若つし哉

九一二 天不尤さす入日の岡の松風にまきも定めぬ露の玉さ

磐手浦

同

九一三 詠古かた糸のいはての浦の浪高みみなたかなたに舟舟もなし

伊奈岡

同

九一四 万四相見ては千年やいぬるいな岡もあれやしかもし君待かてに

人丸

経春

同

人丸

九二五 同 づはねに雪かもしらほいな岡もがなま比かにぬほさるかも

無名

九二七 夫木かたしきに夜や更ぬらん東路のいぞねの橋に月渡るみゆ

知家

射去嶋

同

不説人

九二八 夫木徒に成ゆる身と悲しけれ神の齋の杵木ならねと

後九条

磯山

同

不説人

九二九 同 神のもろいさの杵にたねねとも徒になろくれいかにせん

実方

岩森

同

不説人

九三〇 六帖みたれつ人たにらぬいと河波のさほくは水きよるとか

後九条

磐手野辺

同

陸源

九三一 夫木波はみなこほりて結ふいと河川はほゆるは轂成けり

不説人

岩根滝

同

陸源

九三二 夫木若か代は千年にいちと取敷のいはひの山とならん時迄

不説人

急里

同

顕仲

九三三 夫木若か代は千年にいちと取敷のいはひの山とならん時迄

不説人

何然森

同

俊頼

九三三 散木鶯は春まもつていつかの杜の絶間に声ならすあり

俊頼

齋野辺

同

慈鎮

九三三 名卉花薄まねかほ葉にまろくなんいつきの野へもつみのすみかそ

慈鎮

磯野河

同

後九条

九三四 夫木木枯のいぞの河や水る野見岩間のとこしみつみにけり

後九条

岩波川

同

後九条

九三五 名卉よほつた心は月にあかくれていぞ野の里とほて過らむ

後九条

磯根橋

同

後九条

九三六 夫木中たゆる水のみよやいならん若なみ河の春のはつ風

後九条

松葉若所和歌集第一終

松葉名所和歌集第二 波仁保迎登

花山 寺 山城

九三三 拾遺まてといひとも賢し花山にほしと鳴ん鳥の音も哉
 九三四 名寺かくほり咲て山藤の花山をばひととに見て人帰る覧
 九三五 同 年まていづくわめてそ花山の菩提の種もならぬ物ゆへ
 九三六 大木にぞん嵐のそん花の山はほしとまてて帰る雁金
 九三七 同 塚ええてのほりやすくそ思ひやるたむくる法の花の山寺

杵森 同

九三八 堀後ほくみし稍さひしく成ぬらん杵の森散行みれば
 九三九 六番舟とぬぬはめしむ泉川杵の杜に紅葉しつれば
 九四〇 同 時わかぬ波さへ色にいづみ河はそ森に山風吹くし
 九四一 愚草泉川ゆきさの船は清過て杵の杜に秋ややすし
 九四二 拾玉さほ山の杵の杜の本は散を見ると低しかりけれ
 九四三 同 雨そくそと雲かかちめてけり杵の杜の霧も夕暮
 九四四 同 紅葉ゆく梢の色やたくふらんはそ杵の秋の草
 九四五 葉集庇への袖は杵のよりなぬしくるまに色替り行
 九四六 類聚白妙の夕波涼しむみ河杵の森の竹の下道
 九四七 新六泉河夕渡りきて山城の杵のよりに宿やからまし
 九四八 大木呼子鳥鳴音そいとそ夜なる杵の杜の夕方の声
 九四九 同 玉の緒に杵の杜もなりけり降白雪の消ぬ限りは
 九五〇 御集杵はら木末ともとに染かへて残るくまなき杜の月影
 九五一 夫木真木のつあらし山かけて時雨の杵の森を色に出ぬる
 九五二 同 涼しさは秋そ打出る泉河杵の森のさしの下水
 九五三 新葉散はくし杵の杜の名残ともしらぬはかりの言の葉も哉

葉室 里 山城 名号ニテリ

通田 九五四 皇治 此山の麓にぞみる兵竹のはむろの聖の代々の傍
 尤俊 世まのかれては室と云山里にもりみわて
 静規 侍けるに花を見て詠侍ける
 中務 九五五 新抄探いざや猫花にもそめし我心でても浮世に帰りもそする
 為家 羽束師森 同 類ま
 九五六 金葉家の風吹ぬ物ゆへはがしの杜のこの葉らしほてる
 九五七 拾玉 霜雪をいたく年になぬれば人を見たには(か)しの杜
 九五八 千五百時鳥尋ねかねたるうらみして帰るぬやほかしの杜
 九五九 統拾もしても袖やしほれむ数ならぬ身をほかしの杜に求は
 九六〇 後撰忘れして思ふ歎のしけるもや身をほかしの杜と云覽
 不誠人

俊頼 九六三 同 河風の来き初瀬を歎つ君かあるくににらん人もあへや
 俊頼 九六三 同 ころくの初せの山の山に端にいさよ雲は妹にがもあらん
 九六四 万六 初瀬女のくるゆふ花み吉野の滝の水沫に味未らすや
 衣笠 九六五 万七 三諸つく三輪山ぬれは隠口の初瀬の檜原おもほゆるかも
 謹岐 九六六 同 初瀬河しらゆふ花はち滝瀬をさやくも見にし我を
 基俊 九六七 同 隠口の初瀬の山に照月は満かけてしてそ人のつねなき
 羽尻鳥 九六八 同 初瀬川にわらう水沫の絶はそ我思ふ心とけすも思はぬ
 公朝 九六九 同 まが言かきかま言の隠口の初瀬の山に庵りすといふ
 俊文我 九七〇 同 初瀬河流る水おせもはにみわてにす浪音そそやけき
 宗良 九七一 万八 隠口の初瀬の山は色付ぬ時雨の雨は降にけらしも
 坂上 同 同

定家 九六〇 後撰忘れして思ふ歎のしけるもや身をほかしの杜と云覽
 定家 九六〇 後撰忘れして思ふ歎のしけるもや身をほかしの杜と云覽
 慈録 九六一 万三 隠口のほせそ女か手にまける玉は乱てありといはしやも
 同 九六二 同 河風の来き初瀬を歎つ君かあるくににらん人もあへや
 同 九六三 同 ころくの初せの山の山に端にいさよ雲は妹にがもあらん
 俊頼 九六四 万六 初瀬女のくるゆふ花み吉野の滝の水沫に味未らすや
 衣笠 九六五 万七 三諸つく三輪山ぬれは隠口の初瀬の檜原おもほゆるかも
 謹岐 九六六 同 初瀬河しらゆふ花はち滝瀬をさやくも見にし我を
 基俊 九六七 同 隠口の初瀬の山に照月は満かけてしてそ人のつねなき
 羽尻鳥 九六八 同 初瀬川にわらう水沫の絶はそ我思ふ心とけすも思はぬ
 公朝 九六九 同 まが言かきかま言の隠口の初瀬の山に庵りすといふ
 俊文我 九七〇 同 初瀬河流る水おせもはにみわてにす浪音そそやけき
 宗良 九七一 万八 隠口の初瀬の山は色付ぬ時雨の雨は降にけらしも
 坂上 同 同

九七二 万九初瀬川夕渡りきてゆきも子か家の御門はちか付にけり

九七三 万十初瀬風かく吹夜半はいつまでか衣片しき我獨ねん

九七四 同 あま小船初瀬の山に降雪のけりかく恋し若か昔せする

九七五 万十一 隠口の豊初瀬もはとらめのかしき道とみふらくはゆめ

九七六 同 初瀬河はやみ早瀬を結あけてあがすや妹ととひし君はも

九七七 同十三 波本浮てなぐる初瀬川よるへき磯のなまかびしき

九七八 同 隠口の初瀬の国に妻しあれば石はふれとも猫せきにける

九七九 同十六 事しあはれはもはせ山の若木にも隠らほとも思ふなれはせ

九八〇 万巻初瀬河はくはくはしはらねともけふのあせに身さへ流ぬ

九八一 堀川立拂る春のしきは農しくはせ山の雪の村さえ

九八二 堀川つねよりも初瀬山の呼ぶ馬声むつましく聞ゆなる哉

九八三 同 夕つくひすも春にみ渡は雲せかこれる小初瀬の山

九八四 同 暮れは渡る我年なみも初瀬河うつれる影もみつわさして

九八五 同 暮集時鳥きこくとくしもこころねと初瀬の山はたより有けり

九八六 拾玉我心つきはけてねとやいはりすす小初瀬山の入相のかね

九八七 同 一身のうさも思ひもして初瀬山つきぬる鐘の音をかなき

九八八 同 初瀬山いく入相のかねより松風ふるる在明の月

九八九 同 庵のうへにく重錦をふきつらん花散る小初瀬の山

九九〇 名寄初瀬山谷をはけて板ひさし下吹風に梅の香をすする

九九一 建保初瀬すなかりす夕の山風に秋にはあへお賤かたままき

九九二 同 百韻初瀬すなかりす夕の山風に秋にはあへお賤かたままき

九九三 同 百韻あま小舟初瀬の山の杜聴いよ雲のほかにぞ鳴

九九四 同 名寄初瀬河岸の若ねの白つししうしなは見て恋る矣

垣安 堤池 大和 仙覚二見々

人丸 九五五 暮歌はほすの堤の上に有たししみしたまればやまとの

無名 九六六 万二はばらすの池の堤の隠ぬの行立をしす舎人はまどふ

同 九七七 同 白妙の麻の衣きはばらすの御門の原にあかねす

人磨

羽易山 同 類多

無名 九八八 万初歌大鳥のはかへの山に我恋る妹はいませと人のいへは

同 九九九 万十 春日なるはかへの山にさほの内へ鳴行なるは誰よふこ鳥

娘 〇〇一 名寄かまきのはかへの山の山風はららひもあへぬ霜の上の月

俊頼 〇〇二 同 尹陽の羽かひの山の春の色にひとりましましらぬ若つし哉

同 〇〇三 同 鶯のはかへの山も白妙に雪は降つて鳴ていつなり

仲実 〇〇四 同 大鳥の羽かひの山に降雪を誰につけよといそくみと鶯

顕昭 〇〇五 同 鶯のものが羽かひの山越て鳴ねもすし短夜の月

西行 慈鎮 俊松岸 振津 藤盛 公朝 中務

同 〇〇六 夫木まづ月ははつかの里の骨を誰あらましに衣うつらん

同 〇〇七 折古 秋はるははつかの山のさびしきに有明の月を誰と見るらむ

同 〇〇八 柳抄津の国のはつかの里に住人はけふかあすかとよをも歎かん

同 〇〇九 御集 逢事も今ははつかの山のなも我身ひとつに更る夜の月

同 〇一〇 同 時鳥声ははつかの山の有明の月にしほしやすらへ

同 〇一一 堀百出しよりむまの教をかぞふればけふはつかに草枕する

同 〇一二 夫木まづ月ははつかの里の骨を誰あらましに衣うつらん

俊頼 同 国信 後鳥羽 後鳥羽 後鳥羽

後鳥羽 後鳥羽

橋下寺

同 名寺ニテリ

〇三 現六 長柄なる橋もし寺もつくる世おこぬ家を何にとへん

原山

同 葉垣

〇四 名舟はら山でやの床のかりふしに鳥の音聞えぬ此夜は

原池

同 類子

〇五 六帖 原の池に生る玉藻のかりそめに君を我思ふ物ならぬに

〇六 堀後 冬寒み鳥鳥すたく原の池世にむすほる氷しにけり

〇七 新六 原の池の見ざましりも浮ぬは我にもあらず世にまされつ

〇八 散葉原 池の芝間やとる月影はわかれし秋のかたみせけり

〇九 天木 原の池の玉もに花ぞ咲ける汀の萩の影をよとして

〇一〇 同 しろや君づく陳なき原の池にけはらぬ鴛の夜ほの浮ねを

〇一一 千首 芥もつ心袖かみみれば案の膝咲かざる原のいけ水

茨村

伊勢 名寺ニテリ

〇一二 名寺 修行佐ぬいぞ茨村に立まらん朝け過なほひなせけり

林崎

同 葉垣

〇一三 名寺 林崎まほはけいさとをるへきつみの昔向を打ながめつ

針河

同 葉垣

〇一四 衣集 衣ぬ針川の青柳の糸よりかくる春ほきにけり

波賀地浜

志摩

〇一五 山集 いし崎におどり船ならむとてはかちの波に浮びてそ寄

花園山 里

参河

葉垣天宮城名園上野
依家物語歌集卷第四

光俊

〇一六 堀川 細川の若園の水もなから花々の山の峯の露める

為家

〇一七 出集 時雨初る花園山に秋著て錦の色もあらむる哉

貫之

〇一八 淡集 浅緑がすめる空の純間より梢ぞしるき花園の里

仲実

〇一九 同 よそながら匂ふ梢も見ると見ると霞にみよそ花園の里

為家

〇二〇 同 春霞立かくせとも鶯の鳴音にしろき花園の里

為家

〇二一 春霞 春霞花園山を朝たては桜かりとや入の見るらん

萩山

参河

俊類

道忠朝臣三河国名所歌合萩山

仲正

〇二二 夫木色くの錦とぞ見る萩の山しからむ鹿や秋は立らん

未知人

〇二三 同 白露は萩の山へ置れはうす紅の山とこそなれ

為尹

〇二四 同 ちりぬき花のよしきにいづく折もやれぬ萩の山哉

原野沢

同 葉垣

長明

〇二五 霜集 霜枯しはらの沢の浅緑駒も心は春にとめけり

長明

〇二六 名寺 五月雨は原野の沢に水越ていれみかはら沼のへはし

浜名橋

海浦河 遠江

長明

〇二七 堀百 東路のはまの橋めし柱波はおれともまた立りけり

躬恒

〇二八 同 今みは橋柱くちらほて浜名はかりを聞渡る哉

躬恒

〇二九 衣集 水の上の浜名の橋もけにけり打つ波や舟にけりけん

西行

〇三〇 六百番 都思小浜名の橋の旅人や浪におれては恋渡る賢尼

西行

〇三一 拾玉 雁金の霞にける玉章とを浜名の橋に詠めつる哉

西行

〇三二 同 霞しく松風いそく波の上は浜名の橋を誰作りけん

仲実

西行

為志

道經

- 〇四三 同 波にうく霞の色やいならん 浜名の橋の松の梢に
- 〇四四 同 さん渡る月に心の通ふがなほまの橋の有明の空
- 〇四五 建保をのから見るあもしろお波の上は浜名橋と志や波覧
- 〇四六 同 はるくも思ひと渡る東路や 浜名の橋の波にぬれつゝ
- 〇四七 同 あふいとも遙に月の行かたも浜名の橋の空にまかへて
- 〇四八 同 行かよふ浜名の橋の白浪の跡なき道のしるへ也けり
- 〇四九 建保白波の浜名の橋にかけてたに思ひしことか雲の絶間
- 〇五〇 同 きのからかけやとと行て見ん 浜名の橋の水の白波
- 〇五一 同 あふ事は浜名の橋に行まよみ跡なき波に残る面かけ
- 〇五二 同 霧渡る浜名の橋の夕波に人となえとあけてしるゝ
- 〇五三 同 思ひあはは隔つる霧もなほまし 浜名の橋の秋夕暮
- 〇五四 愚草東路やはまの橋に引駒をさぞ待渡る相坂のせき
- 〇五五 玉吟 打渡る浜名の橋のいり波にたなゝし 小船誰をこふらし
- 〇五六 夫木 入海の浜名の橋に日はくれて秋風わたるこしの松原
- 〇五七 同 朝霧に浜名の橋もたとえして雲に渡る秋の雁金
- 〇五八 同 沖つ塩高しの浦の夕霞いつら 浜名の橋もみゆらん
- 〇五九 同 たち宿るたか急ならし 東路の浜名の橋にあまぞ釣する
- 〇六〇 同 浪の上を隔つる松の梢より 浜名の橋に秋風そふく
- 〇六一 名奇 我心とをたあふみの浜名よりみゆらしの里の妹かりぞ行
- 〇六二 同 はやく見し浜名の海に立帰りむすはぬ波も契有けり
- 〇六三 同 これまても人になれぬる契哉 浜名の浦の袖の塩風
- 〇六四 同 浜名河入塩寒き山風にながしの奥も荒増る也
- 〇六五 同 草枕たくれ寒し塩のさす 浜名の橋の秋の浦風

初倉山

同 藻塩

- 同 〇六六 藻塩 打渡す行せあまた大井河みえとぞ遠き初倉の山
- 同 行志 同 藻塩 和名二数智郡
- 同 定衝 〇六七 名奇 浜松のわはらぬ陰に尋きて見し 人なみに昔ぞぞ思
- 同 修成せ 〇六八 同 波の音も風のたよりになくへきて梢に寄る 浜松の里
- 同 映侍は 〇六九 名奇 大かしの山松に夕なる望野の橋もとけて月渡るみゆ
- 同 忠定 同 橋下 同 名奇テリ
- 同 知家 同 腹河 同 藻塩
- 同 範宗 〇七〇 名奇 ばら河やせはの水の底清みすむ里人の心とぞしる
- 同 行家 〇七一 藻塩 霜枯のはらる河霧うさめてみ旅の空にも有思ひ哉
- 同 康光 同 端山 原峯 駿河 藻塩
- 同 定家 〇七二 続古また宵のは山のほくし見え初て展待とたにいかでしら南
- 同 家隆 〇七三 塩後ともしするは山の原に立鹿のめもみせ世を歎てそふ
- 同 中務 〇七四 同 ともしして端山のすそに立鹿を待とせし間に妹や恨みん
- 同 有象 〇七五 しまりするは山が峯を露けさも帰る道はまほはぬ物を
- 同 長方 同 走湯 神 伊豆 類ま
- 同 基俊 〇七六 玉葉 伊豆の国山の南に出る湯のはやきは神のしるし也けり
- 同 慈鎮 〇七七 夫木 わたみの中にむかひて出る湯のいつを山とむへも云けり
- 同 仲正 〇七八 同 走湯の神とはむへさいひけしはやさしるしのあれば成けり同
- 同 雅經 〇七九 同 鎌倉 右大臣

小宰相 鎌倉

〇七六 玉葉 伊豆の国山の南に出る湯のはやきは神のしるし也けり

同 鎌倉 右大臣

箱根 山

相模

〇七九 万七 足柄のはこね飛越行田鶴のともしきみは天和しおもほゆ

無名

〇八〇 同 十四 足柄のはこね山に粟まきて寒はほはれも粟なくもあやし

同

〇八一 同 あしがりのねのねろに草のはな事なれや紐もかすねん

同

〇八二 家集 あしがらさかみにゆかん玉簾箱根の山の明んあしたは

人丸

〇八三 同 風吹は茗根の山の山こすけなみきて我に心こめよ

元真

〇八四 堀百箱根山す紫のつほ重三三は誰か染けん

匡房

〇八五 同 もしさともしくしん物を箱根山明れは氷る玉篠の露

顯仲

〇八六 万七 夫木わかもふかはねの山の糸栂結び置たる花むせそみる

俊頼

〇八七 夫木 わかもふかはねの山の糸栂結び置たる花むせそみる

顯昭

〇八八 同 あけぬ間に箱根の山の時鳥三声たに鳴渡らん

試人

〇八九 同 箱根山麓野へ女郎花たまく栗の色に咲らん

中務

〇九〇 同 玉くしけ箱根の山の峯がく水海見えてすめる月影

履融

〇九一 同 杵ちるほこねの山に吹風は紅葉をまける心ち社すれ

鎌倉

〇九二 新葉 我末のよにわするな足柄や箱根の雪を分し心は

俊光

早河

相模

兼盛

〇九三 万四 づくしと我思ふふが早川のやとくも猫や崩む

坂上

〇九四 同 早河の瀬にふる鳥のよしも波思ひて有しわかほもあはれ

試人

〇九五 万七 水隠にいさつさあまり早河の瀬には立てもにははあやも

不知

〇九六 現六 早河の瀬にふる鳥のおほひは我袖のこと波のよる覧

試人

〇九七 夫木 東路のゆさかを越て見渡はしほきながら早河の水

信実

〇九八 同 早河のせきりあやうき船渡りせかひにむかへ道遠くとも

信実

〇九一 夫木 秋かみ箱の池へも朝ゆけは水のかみ見ぬ人せなき

法和

原田里

同 夫木三当国

〇一〇 夫木 東路 原田の里に苗代の水引つれし春せ恋しき

仲正

萩原里

常陸 武藤三当国

〇一一 夫木 秋かみ箱の池へも朝ゆけは水のかみ見ぬ人せなき

光俊

比歌は康元三年鹿嶋の社にまうて侍けるに

近所に萩原のきと云所をよありと云く

葉山里

同 夫木三当国

〇一二 夫木 秋かみ箱の池へも朝ゆけは水のかみ見ぬ人せなき

家陸

〇一三 同 つくは山葉山の月の深き夜を里にはしけき鳥の声哉

試人

花垣里

近江 類考

〇一四 新詠 白妙のゆふ取して神まつる卯月に匂小花垣の里

俊光

波母山

同 類考

〇一五 風雅 波母山や小ひこの杉のみ山井は嵐に寒し問人もなし

御歌

走井

同 類考

〇一六 万七 落滝つ走井水の清けければ波ら我は行かておかも

無名

〇一七 同 比小川霧をむすへる滝をゆく走井のたこあけせぬ共

同

〇一八 堀百 走井のかけひの霧はたなひけとのかみにゆる望月駒

俊頼

〇一九 拾玉 いかだして心けがさし走井の清きながらのすささめや

慈鎮

箱池

武蔵

八雲御抄并兼盛二当国

二〇新六旅人のゆきまをいそぐ相坂にはやくそみゆる走井の水
 二一夫木走井の河瀬にちたひ御政して早くそ祈る神はうけよと
 二二夫木はしり井の寛の水の涼しさに越もやられず相坂の関

波止土濃

近江

文応元年七社百首

二三夫木はしとのまきの板橋石橋につまきてのほろ山ぞかしこき

半山

同 藻塩

為家

二四秋葉置霜や染はつすくん紅葉のむらこにみゆるはした山哉

二五同 時雨するはしたの山は紅葉との色つく程の者にそ有けれ

花園

同

二六松玉散たればさ、波よする心地して風も嬉しきしかの花園

二七同 音羽山ふかき霞を分入は大津の宮そ春の花そ

二八同 神風もこそ思からん幾春も匂ひをこそよしかの花園

二九月葉残りける都の春のひかりかな昔かたりの志賀の花園

三〇愚草宮木もりなきさの霞たなひきて昔も遠きしかの花園

三一御集あふみなるしかの花園里荒て鶯ひとり春を忘れぬ

三二夫木にはの海の霞吹行春風に波もいくのしかの花園

三三名寄あすよりはしかの花園まにに誰かとはん春の古郷

埴村石井

信濃

藻塩 和名埴科郡

三四万十人皆さとはたれともはしなの石井のてか事な絶えぬ

針原

上野

五代集歌枕并藻塩二首

三五万七時なほおまた衣のさほしき衣は原時にあらぬとも

為家

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

憚関

陸奥 類字

二六後拾しるしめや身そて人のほかりの関に波はともそりけり

二七夫木越やしてふまなくおしく見ゆる哉紅葉の色に憚の関

二八藤川かくはり借む心をはかりの関ともいはず月そ明ゆく

蓮浦

加賀 藻塩

二九懐中つみふかき身はほろふやと音に聞蓮の浦を行てにみん

羽咋海

能登 和名羽咋郡

三〇万七しほちかした越くれはほくひの海朝なきしたり船梶もかも

這槻川

越中 仙寛抄二首

三一万七たも山のゆきしくししもはつきの河の渡りせあふみつがすも

春部村

丹後 藻塩

三二藻塩畑たつ春へ村は古のなほの御代のけしき香そする

播磨湯

播磨 八雲御抄

三三山峯集はりまかたなのみふきに漕出てあたり思はん月を詠ん

三四拾玉播磨湯磯うつ波はみふなれてかたふく月に夢を残しつ

三五同 いそく船を爰にはよせし播磨湯いつくも月めあしなれとも

三六堀百播磨かた恨てのみと過しかと今夜ともよりはあふの松原

三七月清播磨湯よりまきけその舟路武浦の松風声よほる也

三八千五百播磨湯磯うつ浪のなみの間に友も千鳥声のこる也

花見山

備中 藻塩

一三九 夫木今せしむらぬ花見山風もつらふよふとまはるよと

離小嶋

紀伊 八雲御抄

一四〇 類聚あし磯にまして思へ玉の浦のほなれ小嶋の夢にしみゆる

一四一 同 玉の浦離小嶋の塩の間にまありする田鶴の鳴ゆる

一四二 夫木汐風や遠より千鳥玉の浦の離小嶋に及まそふなり

一四三 同 人目見ぬ離小嶋のこひしに鶴の鳴りもたより有し

一四四 吾妻小夜更く月影清み玉の浦のほなれ小嶋に千鳥啼也

箱嶋

伊予 藤壺 出所可尋之

一四五 名きほく志のせまてきうる君やしもた立塩はみや見えすや

箱崎

筑前 類各

一四六 常葉巻ひたひるすうかの海のすまの浦に波立出と箱崎の松

一四七 新千忘れすも心つしに立降りふた度みてし箱崎の松

一四八 新松疎たれて幾代へかみ箱崎のせしむる松も神こまにけり

箱崎の神主とかしぬの神主と論をしける
時よめる

一四九 常葉箱崎の松はまことの緑にてかひみかたもつみほきこえず

一五〇 夫木箱崎や松吹風にのしけり波くほかまてなびくひまきと

一五一 箱崎や千代の松原石たみくづれんせまてなほはましとせ

博多 沖

同 兼盛

一五二 堀後から人ほしかのとしまに船出してはかたの沖に時つくる也

一五三 同 うら原平はかたのふきにかよりける唐船は時つくる也

一五四 松玉めしやはや博多の唐のへたにもとほめぬ事哉

隆博

一五一 夫木舟出せしはかたやいつしまたはしらぬらさの山ぞみえける

一五二 同 我恋ほはかたをさ出る唐船のゆたのたゆたの追風をまつ

速見浦

里淡 筑後 藤壺或近江

公朝

一五三 一 吾妹をほみ汝風やまはる吾松椿ふさがるゆゆめ

信実

一五四 二 びた事もゆめしければや道遠みはほみ里に急ぎ野見

忠度

一五五 名 奇おほつが我こつても時鳥はやみの里にいのち鳴らん

速日

一五六 良玉わきも子を速見の浦の思ひ草しりりもまら恋もする哉

速日 半

日向 類各

一五七 流千かた山かぬ速日の嶺に天くたる天の御旅の国ぞわか回

旗野

未勘

類氏

一五八 万十みぞれしり板間風ゆき寒き夜やはた野に今夜わが独ぬん

頭朝

原岡山

同

一五九 常葉朝焼るかりおそなごのむら鳥ははらの岡山越やぬらん

一六〇 夫木未つたひて梢の蝉も鳴くらし青葉かきなる原のまか山

野も

花奏

同

一六一 名 奇立波に心のはせて是ならん花かみなの春の明ほの

管家

箱嶋磯

同

はみかたの磯にて京にのぼるに

俊頼

一六二 常葉白川の関よりうちほのとけくて今箱嶋のいづかる哉

兼昌

花野

未勘

慈鎮

一六三 夫木陸雪の花野に出て賤の女もあさての若な今か摘らん

国基

隆源

長皇

高遠

実方

公任

柳襲

重之

内大臣

小宰相

御製

西行

伏見

内大臣

慈鎮

重之

小宰相

御製

西行

伏見

内大臣

慈鎮

重之

小宰相

一六八 秋萩の花野の薄穂には出す我恋渡りかくれ妻はも

一六九 夫木露暗花野の小萩咲にけり行かふ人の袖匂ふなり

一七〇 同 春またすいとく花の梅かえにうらとさ雪の降ぬ日ぞなき

一七一 同 秋萩にまほし花野の花薄さぬく杖ぞ錦なりける

一七二 同 露すがる花の薄さのれの草の杖の秋やしをらん

一七三 同 降雪の花野のあざち百妙に何の草木もわかぬ比かな

箱浦

一七四 秋集菅の浦にあげ暮めそふ田鶴の千年の影とともにおゆ覽

離阿

一七五 現六竹山のすそ原のはなれ阿夏草しけみ鹿やこもれる

波良路川

一七六 万十四青柳のほし路川たになままつとせみとほますたちとならすも

一七七 野宮枝くひていまそ鳴らん青柳のほし路河辺の鶯のこゑ

花園森

一七八 名寺春のくるけふとも我や忘まし花その杜のかすまさりせは

西河

一七九 続後なる滝やしの河瀬に御秋せん若くす波も秋やちかさと

一八〇 新穂吉西河や御幸の跡をかさねても年代を数ふ鶴の毛衣

一八一 夫木のものさうらなすととも西河のあみたにあらは魚もすくはん

一八二 千有明方に夜は成にけり鳴滝や西の川瀬にうつる月影

仁和寺

仁和寺にてよみ侍りける

同

仁和寺にてよみ侍りける

一八三 玉葉山里の秋の別のかなしきは鹿さへもふしきまりけり

西市

山城 菜畑

大後寺徳

一八四 才七西の市に只独出て目ひらほす買しきぬのあきしりかも

一八五 才二にふの河瀬をは渡りて行くと恋したむ我せとちかきひこね

一八六 同 歌をとりてにふのひ山の木よりきて舟につくりて真槌ぬき

一八七 名寺五月雨に丹生の河瀬の杣くたしひかぬにすきさの山きは

一八八 同 水増るにふの川女の五月雨に袖入ししね植ながすあり

一八九 草庵集丹生の河瀬ながすはすむ月の影をほりと思ひ出まし

一九〇 菰葉忘ぬや御かきにちかき丹生川の流れて浮てくる秋霧

一九一 夫木植ながすにふの河瀬にふる鴨はめづれにけり立もさほかぬ

一九二 同 河上のにふの庵のまきの板ととせいはふ万代まてに

一九三 同 いかたさほ錦をわきて下すありにふの河上紅葉もろしく

一九四 同 かし人のわた瀬の波も道絶てにふのかはらう五月雨の比

一九五 同 浮しつみ木葉流ると見えろほにふの川瀬にかつく鳴鳥

一九六 同 西天寺のほとりの柳を説く

西天寺

同

俊成

光吉

義孝

急尹

西天寺のほとりの柳を説く

西天寺

同

後醍醐天皇大納言典侍さまかへて後任吉の

西林寺と云所にすみ侍りける時彼寺の梅の花

をあざせけるに奉りければ

後醍醐天皇大納言典侍さまかへて後任吉の

無名

長皇

無名

後徳

中務

後京極

頼阿

頼阿

頼阿

頼阿

頼阿

光俊

長方

井入道

法知

師海

僧正

一九一 新葉わかたむ西の林の梅の花みのりの花のたかねとせ見る

後村製

二一 早慶息しびてなほの海水滑舟のまほらねともめみし物と

二二 名寺半たがき此山本は影くれて月残れるにほの海水 為条

西宮

同 藻塩

二〇〇 拾玉西の海に風にしせよ西の宮あつまにのみやまひすさふらふ

慈鎮

二四 同 雲の波煙の波やとち花の霞にしつむにほの海水 同

二〇一 歌名にしおほ頼みせがぐる西宮そなたに我を道引やとて

性阿

二五 愚草跡ふかさ我立杉に杉ふりてなめ涼しきにほのみつ海 同

二〇二 類 名にしおほ西の宮神を頼むかん其方をつらに頼身なれば

俊忠

二六 玉吟さく波や玉藻にめとる鳥の海の霞のなまほ春風とふく 同

二〇三 類 聚柴小船まほにかけなしゆふして西の宮へかさまつりしつ

俊頼

二七 同 には海の霞吹ゆく春風に夜もくよの志賀の花園 同

錦嶋

伊勢

伊勢のちの錦の嶋にいそめの紅葉の散けるを

西行

三〇 夫木にほの海は氷らぬ波もなかりけり千里にすめる冬のよつ月 光道兼

二〇四 山巻葉波にしく紅葉の色をよしふ故に錦の嶋といふに有覧

志摩 藻塩 出雲有間名

三一 同 見渡せば湖の朝なまき空晴て遙にすむ沖つしま山 為条

錦浦

志摩 藻塩

二〇五 名寺にまませに色をつきてよる月ほ錦の浦よゆもせけり

中務

三二 同 湖の海やしなびてはる秋の月みかく波間を下す柴船 走条

二〇六 同 こままする柳枝もなかりけり錦の浦の春明ほの

大相部

三三 同 湖の海やしなびてはる秋の月みかく波間を下す柴船 走条

久閑浦

遠江 藻塩

二〇七 万サとへたはみしほの磯とにへ浦とあひてしあらは事もか後はん

武蔵 藻塩并夫木二見あり

三四 同 湖の海やしなびてはる秋の月みかく波間を下す柴船 走条

二〇八 夫木東路にありといふなるにけ水の迹かくれてもよも過す哉

俊頼

三五 同 湖の海やしなびてはる秋の月みかく波間を下す柴船 走条

新治

常陸 和名常陸國新治郡

二〇九 万二にひはりの今つくる道せやけくも聞えけるも妹かづのこ

無名

三六 御集 辛時や春の波猫さえて霞にびりぬ湖の海水 同

二一〇 万十九にひはりのとはあふも秋風に白波たどらねつくはねの

無名

三七 同 湖の海やしなびてはる秋の月みかく波間を下す柴船 走条

よけくをみればなまきけに思ひつみ来しうれははみぬ

湖海 沖河

近江

無名

三九 同 湖の海やしなびてはる秋の月みかく波間を下す柴船 走条

錦部里

近江 和名海部郡錦部村

四〇 夫木色くの木の紅葉を見渡せばはれとりさくる錦部の里 同 類名

二宮

同 類名

為氏

184

朱仲

184

頼阿

184

同

同

184

同

184

日吉の社に奉る歌の中に二百も

二二三 古今やほしくかけと麓に曇るき本の光は峯にすめども

慈鏡

後冷泉院の御時大嘗会主基方備中国三方の御の歌

新井里

同 類き 和名新井郡

文保二年大嘗会悠紀方己日参入近江国新居郷

二三四 新千二古にやま立まざる御たからの新ぬの里ほにまはりにけり

俊光

新田山

上野 和名新田郡

二三五 万十四にみた山ねにはあぢきわにもそりはなるさらしめやにほしも

無名

丹生山

越前 和名丹生郡

二三六 夫木つけやは妹やよめめん新田山岩の枕誰にがはずと

家隆

饒石河

能登 和名新田郡

二三七 万十九とりのみまけはさぬしも時鳥に心の山へにいゆき鳴にも

大伴

新河

越中 和名新田郡

二三八 万四まかぬふくにしのみまてほの色に出ていけなくのみせめかふらしくは

大伴

錦浦

出雲 類き

二四〇 名寄紅葉なる山下水は染ませの錦川とぞ見えたりとみる

仲志

後拾名に高き錦の浦も

二四一 後拾名に高き錦の浦もみてみればつかぬ海士はすくなくかりけり

道成

二万里

備中 類き

二四二 金葉御調物違ふもくろまをせしはにまの里教さみにけり

家継

二四三 五百君が代は三方の里入くる田のいねのはすまの教にまかせん

隆信

二四四 夫木君が代はまの里入打むれてなみかかたみに若なるを摘

実持

二四五 夫木君が代はまの里ともみゆる哉卯花咲る垣ねくりに

香綱

二四六 同 布さすすにまの里ともみゆる哉卯花咲る垣ねくりに

隆藤

二四七 同 未遠き春のむかへ御調物かすくはこふ二方の里入

隆藤

二四八 同 幾千代限らぬまは子日してにまの松尾の小松をと引

隆藤

新田池

安芸 藻塩

二四九 夫木はしめてや千年の影さうつす覧にお田の池の春の青柳

隆教

熱田津

伊予 仙覚二見テリ

二五〇 万一にきたつに船のりせんと月待は塩もかひぬ今ほ清くな

額留王

堀河

山城

二五一 同十二にまたに舟葉せんし聞し苗に何かも君か見えよとろくん

無名

尔志泊

未勸

二五二 夫木法のめくろしき道もかかきてはしの泊と聞そりれしき

行家

堀河

山城

二五三 六帖三堀河の瀬のぬくの打渡しあはて人も恋渡るかな

好忠

二五四 詞花水上のさためてければ君か代にふたひすめる堀河の水

公藤卿

穂積

大和

二五五 千五百うれしくも其人教に流きて跡を尋ぬる堀河の水

公藤卿

穂積

大和

二五六 長髪みてくらしも奈良より出て水鏡のほつみにいたり

公藤卿

鳥網はる坂とを過て石はしるがみなひ山に朝宮に
住(ま)りて吉野(へ)入(ま)すみはむかひおほはゆ

二五七 現存 水蓼の穂つみに通ひむら鳥は立右に付て秋を悲しき

細川山

同 八雲御抄

二五八 万七みみ洲の細河山にた(ま)ゆみろ東まきて入にしるな

二五九 名舟みな洲の細川山々時雨けるまゆみの紅葉今盛かも

二六〇 新六立渡る雲間にみゆる三月月の細河山の夕くれの空

二六一 夫木けさみればまゆみの紅葉色ぞき細河山に時雨降らし

二六二 同人しす紅葉しにけりみな洲細川まゆみい(つ)時雨なん

堀江

摂津

二六三 万七小夜更で堀江漕なる松浦船楫音高しおほはみかも

二六四 同 妹が目もみま(く)堀江のくし波しきこ恋つ有と音(と)ぞ

二六五 同 松浦船みたれ堀江の水尾はやみ梳るまな(く)おほはゆるかも

二六六 同 堀江には玉しきましも大君も御船(と)かんとかねてしりせは

二六七 同 玉しす君かくいてい(づ)堀江には玉しきみてうきて通はん

二六八 同 堀江より水おひきしつ(づ)御船さすしつ(づ)ものもは河の瀬ま(と)せ

二六九 万七さきもりの堀江漕つるいつ(づ)船楫とる間なく恋はしけ(と)ん

二七〇 同 堀江より朝楫みち(と)よ(と)つみ貝に有せば(と)にせましも

二七一 同 若菊に堀江漕なる楫の音は大君(へ)のみま(と)ま(と)てに

二七二 同 堀江漕いつ(づ)の船の楫つ(づ)音ははたてぬみ(と)おほ(と)みかも

二七三 同 堀江よりみ(と)お(と)か(と)は(と)る(と)楫の音の間なくせならは恋し(と)かりける

二七四 万七ふ(と)な(と)ま(と)は(と)堀江の河のみ(と)な(と)ま(と)は(と)来(と)ぬ(と)鳴(と)は(と)都(と)鳥(と)かも

二七五 堀後たかせ舟のほる堀江の水をあ(と)み(と)草(と)かく(と)れ(と)は(と)蛙(と)鳴(と)なり

二七六 新六都鳥声も寒け(と)ふ(と)な(と)ま(と)は(と)堀江の川(と)の(と)ほ(と)る(と)霜(と)夜(と)に

二七七 拾玉した(と)も(と)難波堀江の(と)蘆(と)も(と)春(と)にな(と)して(と)春(と)は(と)過(と)ぬ(と)る

二七八 玉吟み船く堀江の水も底すみて玉しく月の影ぞきける
二七九 六島漕過る舟さへ(と)ま(と)む(と)心(と)して(と)ほ(と)り(と)江(と)の(と)蛙(と)し(と)る(と)なり

二八〇 建保くれば難波堀江の(と)芦(と)の(と)葉(と)に(と)かり(と)を(と)分(と)て(と)飛(と)簾(と)かな

二八一 同 しまみ(と)て(と)難波堀江の(と)芦(と)の(と)葉(と)に(と)の(と)れ(と)乱(と)れ(と)も(と)ふ(と)簾(と)哉

二八二 夫木けふ(と)と(と)難波堀江の(と)あ(と)や(と)草(と)に(と)の(と)も(と)す(と)ぞ(と)よ(と)と(と)て(と)そ(と)引

二八三 詞花 任吉の細江にさる身をつくし深き(と)な(と)け(と)ぬ(と)合(と)あ(と)ら(と)し(と)な

二八四 十五首 住吉の細江の(と)あ(と)し(と)も(と)霜(と)枯(と)て(と)よ(と)ぞ(と)な(と)も(と)し(と)る(と)ま(と)を(と)つ(と)く(と)し(と)哉

二八五 十首 住吉の細江漕出る海士船の(と)芦(と)間(と)あ(と)し(と)そ(と)山(と)夜(と)半(と)の(と)月(と)影

二八六 才代(と)す(と)み(と)ま(と)し(と)の(と)岸(と)の(と)松(と)風(と)渡(と)さ(と)なり(と)細(と)江(と)の(と)汀(と)水(と)し(と)ぬ(と)らん

無名
二八七 名舟(と)か(と)き(と)り(と)あ(と)れ(と)は(と)橋(と)と(と)せ(と)なら(と)ぬ(と)鶴(と)の(と)立(と)る(と)し(と)に(と)屋(と)河(と)の(と)水

御製
二八八 夫木明(と)初(と)と(と)空(と)さ(と)かり(と)行(と)星(と)川(と)に(と)我(と)さ(と)へ(と)か(と)は(と)や(と)見(と)え(と)す(と)成(と)覧

家持
二八九 名舟屋合の(と)浜(と)とは(と)誰(と)か(と)名(と)付(と)け(と)ん(と)も(と)し(と)七(と)夕(と)か(と)よ(と)ひ(と)所(と)か

美女
二九〇 同 七夕の(と)あ(と)か(と)ぬ(と)別(と)の(と)ふ(と)な(と)て(と)す(と)は(と)屋(と)合(と)の(と)浜(と)と(と)り(と)成(と)らん

家持
二九一 藤塩伊勢の(と)海(と)の名(と)に(と)あ(と)は(と)れ(と)て(と)波(と)枕(と)か(と)は(と)し(と)や(と)す(と)らん(と)屋(と)合(と)の(と)浜

同
二九二 夫木(と)う(と)き(と)よ(と)る(と)雲(と)の(と)き(と)し(と)へ(と)も(と)か(と)け(と)み(と)れ(と)は(と)屋(と)合(と)の(と)浜(と)も(と)か(と)り(と)に(と)け(と)り

同
二九三 同 逢事(と)は(と)夢(と)か(と)屋(と)合(と)の(と)浜(と)風(と)に(と)波(と)の(と)よ(と)る(と)見(と)ん(と)く(と)ぞ(と)恋(と)し(と)き

同
二九四 同 伊勢(と)の(と)海(と)契(と)も(と)ふ(と)か(と)秋(と)な(と)し(と)今(と)夜(と)か(と)け(と)み(と)ん(と)屋(と)合(と)の(と)浜

衣笠
二九五 題林(と)せ(と)の(と)海(と)や(と)あ(と)ま(と)の(と)河(と)原(と)に(と)つ(と)く(と)覧(と)今(と)夜(と)名(と)にあ(と)ふ(と)屋(と)合(と)の(と)浜

慈鎮

巻陸

樹大冠

知春

康光

後院鳥

相模

顕昭

宗良

覚性

長明

尤俊

前斎

出雲

祐拳

不説人

鹿御製

真親

星崎

尾張 藻塩

堀越浦

下総 藻塩

二九六 堀百ほし崎やあつたのかたのいざり火のほのもしりぬや思ふ心を

仲実

237

三三一名奇白波の立のほりとし此浦も見をかひ有て塩ひる間は

穂屋

信濃

247

細河

参河 八雲御抄

二九七 堀百細川の若間のつこ解にけり花園山の嶺のさすめる

仲実

三四 続古夜寒なるほやの薄の秋風にそよそと鹿も妻も志覧
三五 名奇夜濃なる穂屋の薄の風吹はそよそと誰もおなじ心そ

穂坂小野

甲斐 藻塩

二九八 堀百相坂の閑路にけふや秋の田のほかの駒をむつくと引

公実

三六 夫木薄ふくほやの軒端のかたにひかほは神のしるしもみん

二九九 同 閑の戸に尾花あし毛の文ゆるかな穂坂の駒を引ら有らん

隆源

三七 春雨信濃なるほやの薄のほにでてしらもとらに乱あはや

三〇〇 名奇春草はほさかの小野のはなれ駒は都へひかんとすらん

師時

三八 山叢集水ゆる筏の棹のたゆりれほもちやこまほつ山越

三〇一 斬葉集秋の田のほか駒を引つてよまされせのかひも有哉

後村上
院御製

三〇二 夫木打なひき秋は来にけり花薄ほかの駒も今や引覧

衣笠

細谷河

備中 類考

三〇三 同 花薄ほかの駒にあらねとも人ふちやすき女郎花哉

匡房

三九 夫木春くれは細谷河にちりつもる花もてゆへるさひの中山

三〇四 題林ときぬと氏もにきはぬ秋の田のほか駒をけふと引ける

入道
大納言

三〇 同 苗代に細谷川をせまかけて吉備の山田は帯を引なり

星月夜

相模

三〇五 堀自我ひとり鎌倉山を越ゆけは星月夜こど嬉かりけれ

常陸

三一 夫木夏虫の細谷河をてくす夜は玉の帯するさひの中山

堀兼井

武蔵 類考

三〇六 家集いかてかく思ふ心はほりかねの井よりも猫を深さ増れる

伊勢

三二 同 帯にする細谷川にみゆる火は螢もまかね吹にや有覧

三〇七 山家集込てしる人もあらなんものつから堀兼の井の底の心も

西行

三三 同 冬くれは細谷河に氷して玉の帯するさひの中山

三〇八 拾玉今ほわれ浅き心も忘れ水いつほりかねの井つならなん

藤円

三四 御集まかね吹さひの山風打とけて細谷川に若そくせ

三〇九 家集浅きとす思(ほ)とせほのめせ堀かねの井のつこまじき身を

俊頼

卷心門

紀伊 類考

三一〇 名奇堀かねの水とみ聞武蔵野も皆五月雨の波の下草

後久奈

三五 千載うれしくも神のまかひをしるふて心をふす門に入ぬる

三一一 同 むさしなる堀兼の井の底を浅み思ふ心を何にたへん

伊勢

保都手浦

宍波 名奇ナリ

三一二 夫木武蔵野や堀かねの井の深くのみ茂りせ増るよもの夏草

冷泉太
政大臣

三六 才五ゆきの海士のほつての浦(を)かたやてゆかんとするにいのこと

星岡山

未勘

三七 夫木世とて幾代に成ぬ久堅のあまくだりけんほし岡の山

仲葉

257

細見池 同

三八 名寺あすしに心ほそみの池に生るひしの浮ねのながれとすれ

平群山

大和 藤壘^{三三}山田知彦平群郡

三九 才六から国の虎といふ神をいけとりに入頭とりもも来
その皮をたみみにして八重たみみへくりの山に

卯月とや五月の程に菜かりつゝふるるときに

倍見御牧

甲斐 八重御抄^{三三}甲斐郡
和名^{三三}三井郡

三〇 萩果都までなつてひくは小笠原みの御牧の駒にと有ける
三一 天木小笠原みの御牧に流る馬もとれどなつてなつてとる
三二 天木小笠原みの御牧のなれ駒いとけしきと春はあれ行

常盤 山森林王 山城

三三 萩集ときは山葉の松の年をへてくむせにむ年もみてしか
三四 同 つつらほおときは山の降時はしくれの雨ぞかひなかりける
三五 萩集ときは山色ははらめや春霞たひひくかたはことに成とも

三六 萩集たのみしときは山も大空の霞たがすむよに社有けれ
三七 同 花もち常盤の山登馬は霞を見てや春さしらくしん
三八 千五百言の葉は色にも出てくらねとよきは社の秋の下露

三九 建保秋はとも誰かはいひし権榮のときはの森に鹿は鳴也
四〇 同 色となき時雨の空は替りけりときはの社の秋のたくれ

四一 同 染ぬとも身にしむ色は替りけりときはの社の秋風のこゑ

三四二 同 色かぬ常磐の社の下露にぬけて秋の樟鹿の声

三四三 同 秋にたへぬよその紅葉のから錦常磐の社の色とてひななき

三四四 同 秋もきてとよはぬ花の色そよみしきは森にかる白くも

三四五 同 鹿の音もいかにてときはの社の露色に出へき風の音かは

三四六 坂河花さかぬときは山の山人に春をさしする鹿馬の声

三四七 同 後常磐山麓の野へに年をとて色もかはらぬ松虫のこゑ

三四八 名貴誰住て哀しらくしんときは山奥の岩屋の有明の月

三四九 山葉集ときは山榎の下柴かり拾んかくれて思ふかひのなき哉

三五〇 拾玉雪もるとときはの社の下録わすれぬか花もみも

三五一 同 時鳥まじに来ぬか若ならはよとは社に聞事もなし

三五二 愚草紅葉せぬときは山に宿もかな忘れて秋もよそにくらん

三五三 愚草露にうつる月より秋の色に出て常磐岩の社の陰ぞかひなき

三五四 玉吟むすし露ときはの社の秋風にひくしめ縄の玉ぞかひる

三五五 同 此里はときはの森の藤の花咲かたりてや春をしろくん

三五六 夫木我宿やしきはの里に駒とめて朝たつ雉も音には鳴見ん

三五七 同 坂のはるときは林の名のみしてうつろふ色に秋風を吹

三五八 御集さば娘の染しみよりや深からん常磐岩の社は獨もみもせて

三五九 同 此比のときはの社はほのみまじし枝にも葉にも雪も積りて

三六〇 同 秋の時雨ときはの山も染かねて嵐にかるよその紅葉よ

三六一 同 初時雨ふれとかひなき常磐山身にしむ色を風や渡しん

鳥羽 山田里渡 山城

三六二 万田白鳥の鳥羽山松の待つて指恋ひたる此月ころを

三六三 教範 山城の鳥羽に通ひてみてしかな仙つくりける人の垣ねを

三六四 萩集山城のとはのあたりを打過てはは風の思ひ社やれ

内侍衛

家隆

院家

康光

永縁

忠房

道清

西行

慈鎮

同

定家^{三六}

定家

家隆

同

小弁

重經

羽院

同

同

同

重之

重之

三五五 同 思ふ事いはてやみほは山城のとはくくるしき身とや成覓

三五六 六百番山のはにのこれる雲の絶間よりとは田の面に通ふ橋幸

三六七 名青雲のよよりとるる田鶴の千せふは橋は鳥羽の松は木有ける

三六八 同 山城の鳥羽の渡りのうり作りまほしと思ふ時せらほはかる

三六九 同 日くるればとちの今里炊火立て鳥羽田の面に煙たひく

三七〇 建保年経ぬる松もむかしは山城の鳥羽に逢見ん千代の古道

三七二 同 八百才鳥羽田の橋を刈つみて道ある里の氏を束行

三七三 同 夜もすからとは田の面はなる鴨の声にかたふく在明の月

三七四 同 比程は昔の若の跡ぞかしとはたの里の秋の夕ぐれ

三七五 拾玉風のはとはたの面にせま立ぬ波の渡りに秋やまね覧

三七六 玉吟香まぬと鳥羽田の面ので伝ひ都へも若な橋なり

三七七 御集はむれは秋ちかしと験かな鳥羽田の露に聲飛せ

三七八 同 夏みかきとはたの稻葉露落てまた穂に出ぬ風渡る也

戸難瀬 川港山峯 山城

三七九 堀百松陰のとなせの水に御秋して千年の命のてかへらん

三八〇 方々集となせよりくだす鴉舟のみなれ棹ぬくる音なふ心してと以

三八一 一草少倉山みわぬ嵐の吹からとはなせの流せ紅葉しにける

三八二 名奇大井河川瀬の紅葉ちらね間はとなせの岸にわらわぬへし

三八三 子五百自らよれば衣手涼しあらし山秋やとはなせの白波

三八四 新六五月雨に水がまさまさる大井河戸難瀬のむせきおとす計に

三八五 夫木吹よろす春のあらしの山風にとなせの滝の花のしら波

三八六 同 鴉舟ぞす戸難瀬の滝の夕風にまたさ秋に秋を知らな

三八七 同 となせ河う船にもす篝火の光のまきに明にけるかな

元真 三三八 同 よとに見る戸難瀬の菊の花盛折はやおらん滝はもかな

信定 三八九 同 若波の色とぞ埋むとなせ山紅葉の滝のそくる嵐に

資隆 三九〇 同 雲かふる山の高ぬの夕立にとなせの滝の音増る也

無名 三九一 同 風吹は戸難瀬におもす篠古のあさの衣に錦もちりかく

覚明 隣岡 同 類聚二箇

順徳院 三九二 類聚夢かとも隣の岡の時鳥しのひもあへぬ夜半の声

家隆 鳥部 山野 同

慈鎮 三九三 環巻鳥部山もえし煙もかふとあまの塩やくらみにて行

同 三九四 山家集とリ野を心のうもに分行はいまさ露に袖ぞほつる

慈鎮 三九五 同 かさりなく悲しかりけり鳥部山はさる送りて帰る心の

家隆 三九六 同 なき跡を誰としらねととり山をうくすきかの夕暮

同 三九七 拾玉鳥へ山夜はの烟の立たひに人うもひやいとさふらん

同 三九八 同 鳥部野にとくりて帰る人も皆しての山路のつゐの友かな

同 三九九 同 色にとむ心と思へ鳥部山夜半の煙は何が悲しき

同 四〇〇 同 けさはいと露ささほる鳥へ山夜半の煙は有明の月

匡房 四〇一 方々集鳥部野やわしの高ねの未ならん煙を分て出る月影

俊頼 四〇二 玉吟すまの露もとの半も鳥へ山をくれさき立烟成けり

同 四〇三 詠藻夕暮霧立渡る鳥部山よはのたとく物々悲しき

同 四〇四 家集とりへ山ふり行跡を哀とや野へす虫露に鳴らん

同 衣笠 287

同 雅有 287

同 行宗 287

同 木牌 287

同 四〇五 梁塵のこまははいのうんとぬりらあしにけられるとも岡のうん

同 四〇六 夫木とぬりか袖を露けし柄岡のしけささの行まざるまに

同 頼氏

和名山田乙訓郡 續毛 比上岡吹橋可尋上

284

287

四〇七 同 とも岡の篠の葉たり雪山火はこしに指たかめたなみきなる
四〇八 神道 いまぞとはわかとも岡のこの葉も手にとりて手向にもせん

四〇九 名寺みる月も宿かへも諸天に千年住きとまは井の里
四一〇 大木やかして我心よりつる常舞若牛の水にやとれる月ならぬ共

栲尾

四二一 春鳥抄置るなり雨しらね間に摘てもけとかの尾山の春の若草
泊瀬 山川野 大和

四二二 大船一海小船とませの野へに降雪のけなかく心ひし君が音する
四二三 同 ニつくりの泊瀬の山の山まはにいさふ雲は妹にもあらん

四二四 同 五かぐしくのしませの山をすそつととすめ神のまきし紅
四二五 夫木いかばかり来る嵐とませ河をてす波も夕水けり

四二六 同 あま小船とませの山も白妙にひはらの雪の道見えぬまで
四二七 同 おき波たなくみゆるやあま小船とませのものに積ら白雪

四二八 同 しませ河あなだの里に妹をまきていはとかしほとふみならしつる
四二九 御集打出る香やとませの波間より白ゆふ花の色とくたくる

四三〇 折六吹分る風をたよりの海士小船泊瀬の山に花の香せする

飛火 野原

四三一 塩河飛火野に今もえ出る早蕨のつらおる計ならむとす覧
四三二 同 飛火のにもえ出にけるさわらびを焼とつや人のおふるん

四三三 同 雲雀あやるとふひの原に我独野もせに吠る董をぞ摘
四三四 六百番打むれて董つむまにもふひの霞の内に行かも暮しつ

四三五 名寺なまきかに飛火の野への梢よりなかりて過る時鳥哉

公朝 四二六 同 朝ほらけ飛火かくれの伊駒山せれとも見えす春の霞に
兼即 四二七 月清行年を飛火の野守出てみよ今いかまで冬の夜の月

内少 四二八 悪草春の色とふひの野守尋れと三葉の若ひ雪も消あす
内持 四二九 同 飛火野はまたる年の雪間よりめくむ若ひ春急ける

四三〇 玉吟若なほほさもあらはれ春日の飛火の野守見らみひとなき
四三一 十五白雪のうちにめくむ若葉は埋れて飛火の野守見らみひとなき

四三二 同 春こに飛火の野守ふりぬらん雪間の若ひ年とつみ
四三三 夫木雪消て下もえ急く飛火野におりにあひぬとみゆる早蕨

四三四 同 ほろくも飛火はらも見渡せば霞ともと雲雀立也
富小河 大和

四三五 金葉君か代は富の小河の末すみて千年をふとも絶しと思ふ
四三六 拾玉しるき物を富の小河の流にてひとみちひく鹿の心は

四三七 類聚たえず行とみの小河のみをつくし幾世として君を祝はん
四三八 夫木水清き富の小河のあめ草けし山を待てそ長きねも引

四三九 同 法の海波のかけてもさかぬ世に富の小河の流てそしる
四四〇 同 いかるかやするかの池は水れとも富の小河は流たせぬ

四四一 春前抄萬代にすめる亀井の水かきほとみのを川のながれ成けり

豊尋 寺

永録 四四二 寺歌合けふも又豊尋の寺の入相に花に宿とふ島城の山
肥後 四四三 名寺見しまに誰ひかむらんかつらや豊尋の寺の春の曙

仲実 四四四 玉吟かつしきやとよらる寺の竹の葉に氷れる霜はくらく日みなし
季経 四四五 方ままかこしや豊尋の寺のしくれば西なる枝やまつも又つ覧

四四六 夫木ふりにけるともよらの寺の榎の葉井に猶白玉を残す月影

家隆 四二六 同

家隆 四二九 同

隆信 四三〇 同

有家 四三二 同

頭昭 四三三 同

忠孝 四三五 同

慈鎮 四三六 同

有仲 四三七 同

匡房 四三八 同

聖朝 四三九 同

公朝 四四〇 同

長明 四四六 同

四四七 同 鐘の音にもよみが露を置まふるとよしの寺の秋のよの月
 四四八 同 おなじえも恋とそわきて染つらぬ豊等寺の秋紅葉
 四四九 同 苔ふかきとよしり寺は山伏の行ひもよもこひかりけり
 四五〇 同 降雪に豊等の竹も埋れてひとも見えすなりける哉

新編撰
 為頭
 行家
 孰人
 不知

十羽松原

同 葉塩

四五二 長秋 五十二 五十三 五十四 五十五
 五十六 五十七 五十八 五十九 六十
 六十一 六十二 六十三 六十四 六十五
 六十六 六十七 六十八 六十九 七十

五十二 五十三 五十四 五十五
 五十六 五十七 五十八 五十九 六十
 六十一 六十二 六十三 六十四 六十五
 六十六 六十七 六十八 六十九 七十

十市 里山嶺村 大和

四五一 堀百雲が十市の里のやり火は煙たうとも見えぬせりり
 四五二 六喜喜妹が住ともちの里の煙たになと我方へなひかまるらん
 四五三 拾玉思へた十市の里の哀よりひとつにこむる霧の夕を
 四五四 衣うつともちの里のつらな音にぞ覚えんや袖ぬすず見
 四五五 同 衣うつともちの里のつらな音にぞ覚えんや袖ぬすず見
 四五六 名寿春が又又慶は古郷の十市の山をほのみよしやは
 四五七 同 行て見ん駒くつかけよし原十市の里に秋咲にけり
 四五八 同 み吉野の里もともちの山桜夕の雲に色を移ふ
 四五九 千五百雲く十市の里の夕霞絶間くにか雁金
 四六〇 同 千たひうつ十市の里の小夜衣旅ぬの雪にむすははつ
 四六一 同 み吉野のまま山きは待月は十市の里の影よりぞみる
 四六二 夫木一見し十市の村のはし紅葉又も時雨て秋風を吹
 四六三 同 あふ事のとちの里の大和河思はぬ中に有と杜きけ
 四六四 題林夕名す十市の嶺りうす紅葉葉末に秋の色をさひしき
 四六五 同 なかめやるとちの峯は紅葉しぬい染にける色には有見

師時
 季経
 慈鎮
 同
 国基
 仲正

轟橋

大和

四七〇 堀百わきも子にあふ身なりせはさりと我のみ見てもし轟橋
 四七一 古歌敷ふり玉ゆりすて見ん斗しはしなみぞ轟橋のはし
 四七二 夫木旅人も立河霧に音はかり聞渡るかなとちの橋

小侍従
 通具
 公継
 順徳院
 清輔
 扇御
 折院

兼昌
 覚盛

鳥栖山

同 葉塩

四七三 懐中山かければ声も聞えず鳥すみの宿り付山の名にぞ有ける
 四七四 通河 河内 葉塩
 四七五 名寺はなちてのとちの川の朝ほらけ堤むかひに船よみ誰

同 葉塩

兼昌
 覚盛

河内 葉塩

同 葉塩

四七六 名寺はなちてのとちの川の朝ほらけ堤むかひに船よみ誰
 四七七 師尤

師尤

兼昌
 覚盛

鳥立原

同

四八三 春雨抄御狩すととたらの原をめぐりつて支野のへにけふも暮しつ

鳥嶋 崎磯

撰津 漢城名奇三有法跡 漢城字三鳥馬入

四八四 一万三嶋伝ひとしまの崎を漕ため大和恋しく田鶴さほは鳴

四八五 一名奇嵐吹としまの崎の入塩に友なし千鳥月に鳴なり

四八六 千五百波かくる富嶋崎の友千鳥立かとすければ又來鳴也

四八七 夫木野嶋にや塩みちぬらし玉葉かるとしまも過す田鶴の鳴覽

四八八 同 舟とむるとしま磯の山嵐にちる紅葉や宮のうはふき

四八九 同 むれぬたるとしまか崎の白鷺をたらなは雪の消るとやみん

四九〇 同 妹とこし富嶋崎をかへるまに独しみれはなみたくまし

遠里小野

撰津 藤塩 住吉郡

四九一 万七住吉の遠里小野のま萩もてすける衣のさかり過行

四九二 拾玉住吉の遠里小野にきてみれば真萩が枝に花咲にけり

四九三 同 津の園の遠里まの萩が枝に雪の花咲茶は米にけり

四九四 同 誰かかく遠里小野の秋萩も風に乱る虫のこま

四九五 同 萩が枝に松風よみ住吉の遠里小野の夕霧の空

四九六 詠藻君が代は遠里小野の秋萩もももや如程の風ぞ吹ける

四九七 愚羊旅衣ひととく花の色くも遠里まのこあた朝霧

四九八 玉吟月は猫遠里小野にさき立て行方し山在明の空

四九九 同 私も猫千年の友はねのひせし遠里小野の松虫の声

五〇〇 千五百夜寒なる松の嵐きとみかはは遠里小野に木椅也

五〇一 夫木住吉のさしもせざらん人さうき遠里小野の梅の盛に

五〇二 同 尋てやわらひおゝらん住吉の遠里まの春の里人

五〇三 同 住の江はなにもおひけりも草遠里小野に帰る雁金

五〇四 同 草味遠里小野の朝露にぬるとも摘ん旅の形見に 俊成

五〇五 同 とも鶴や次迎の老をめぐり覽遠里まの雪の村消 幸多院

五〇六 同 見れもあがぬ遠里小野の萩が花袖にうつれるかきへなつかし 頭輔³⁵⁺

五〇七 草庵集たれにかはうらうらひぬらん逢事は遠里小野の秋萩の花 頌阿

五〇八 玉葉集侍文たる心とこせね郭公遠里小野の夜はの声 忠皮

兼宗

定円

良晴

行意

五〇九 名奇深みとりかひある春にあひぬれば霞ならねと立のほりけり

五一〇 家集をまきなさたがせの舟をさしすへて鳥かひにも暮しつ哉 俊頼

人丸

意鎮

五一一 続千皇のあまつみおやのみとりのりつたへて祈る豊の宮人 法師

五一二 続後かけまくもかしき豊の宮柱をまき心は空にしらる 俊成

五一三 夫木そのかみや祈し事はともうけのしらしそ若かあくみせける 土御門内大臣

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

豊河

参河

藻塩和名三飯郡

五二九 類聚狩人のやばきに今宵宿りなほあすは渡らんと河の水

五三〇 名奇風渡夢の寝橋とたてし袖へ入らば豊河の壟

砥上原

相模 藻塩

五三一 丹後記よばましくすのしけみに事かめてかみか原に小鹿鳴也

五三二 名奇浦辺きとかみか原に馴とあてた女の河の塩干とぞま

五三三 同 やつまつの八千代の陰におもなれて砥上か原に色も替しし

刀比河内

同 名奇正国

五三四 百十四あしかりのとひのかふちに出る湯世もたよらにわかいはなくに

鳥羽淡海

常陸 藻塩

五二五 長靴にひりとはあふみも秋風に白波たもぬつくはねの

よけくもみればはかきけに思ひつみ来しうれははやみぬ

鳥籠山

近江 類名

五二六 才四 近江路のこの山なういふや川けのころくは志つもあらん

五二七 堰百毒さうとこの山なる樟鹿の独音を鳴声を悲しき

五二八 棘藻鳴鹿は岑かふもとかこの山林の枕に声あくるなかり

五二九 十五百吹風もあらしになれば床の山夕の鶴うらみてぞ鳴

五三〇 夫木は鷹のかりほの木の大かみやたつる鶴の床の山風

五三一 同 近江路のこの山川なかれてもよろへしらす波の間もかな

五三二 同 風渡るとこの山人をのれのみ夜をかかえてや衣うつらん

五三三 草庵葉渡るべき浅瀬もいさや五月雨に水増り行とこの山河

五三四 十首明は見ん梢の梅ららすや春の一夜のこの山風

五三一 同

今は又名残を駕の声す也たか別路のこの山川

同

衣笠

床浦

近江 類聚正国

長明

五三六 類聚もれのみ事とへ夜半の輿つ波ならはけ床の浦路城共

長明

五三七 千五百打はらふよりも有けん床の浦の浪にひれたる夜はのま蓮

長明

五三八 方香葉をし鳥の夜床の浦の浮枕水らぬ水の隙もとむらん

長明

五三九 家集荒はてぬはらぬ袖のうきみのみ夜幾夜も床の浦風

長明

五四〇 名奇淡のみもろし船も奇ぬし身は浮しつみ床のうし波

長明

五四一 草庵葉敷妙の床の浦波名のみして月にぬね夜のつるる秋哉

長明

五四二 十首歌とよ海人のから藻の打乱たひとりぬの床の浦風

常盤橋

同 八雲御抄

無名

五四三 玉葉色かぬ松によせへて東路のときは橋にかる藤波

無名

五四四 名奇神無月落る木葉に埋れてときは橋も紅葉しにけり

無名

五四五 天木うすくく長閑に匂へしうえまで常盤の橋にかる藤波

無名

五四六 十一 霰ふるるとつ大浦による波のよしもよしともじくからなくに

無名

遠津大浦 同 藻塩

無名

登美津幾山 同 八雲御抄

無名

取古池 同

無名

五四七 夫木君か代はとみつ山さきくにかかぞ増るる代まてに

無名

五四八 名奇妹かてととりくの池の渡間より鳥のね聞え秋過ぬなり

無名

五四九 夫木いふたらはななりとも見えぬかとりくの池にすたく芦鴨

無名

五五〇 十首明は見ん梢の梅ららすや春の一夜のこの山風

無名

五五一 同

無名

五五二 同

常夏里

近江

藻塩井 夫木彦国

五五〇 夫木春とよつける花のひ有て咲みたれたる常夏の里
五五一 同 とよ夏の里とよはなとよはざらんかなててこの咲る比にて

遠山

美濃

名寄ニアリ

五五二 名寄思ひきや都もよそに別路の遠山のにゆき消んとは
五五三 同 土岐郡 同 和名ニ美濃国土岐郡

東くたりけるに美濃の国ときや都にて説待ける

五五三 家集たひ人のひしき物は草枕雪降ともほりせりけり
五五四 同 結ひをきし人やとくらん下紐のときも都に依ぬしねは

刀根河

上野

藻塩 和名ニ刀根郡

五五五 刀十四とね河の川瀬もしすた渡り波にあふすあふる君かも
五五六 六帖とね川は底は濁りてうは澄て有ける物をさねて悔しき
五五七 新撰さかほ袖とねねめとね河の石は踏ともいさかほより

五五八 夫木 刀根川の河原をゆけはさき千鳥石ふむ道にももかり鳴

十綱橋

陸奥

類考

五五九 十載陸奥のつなな橋にくる繩の絶すも人にいひ渡る哉
五六〇 新拾東路の十綱の橋のくるしと思ひししてや世を渡る時見
五六一 新撰拾なかりは十綱の橋にひく綱のくるしき世をも猶も渡らん

五六二 新撰古のつからくるとみしま陸奥とつなな橋の中は絶にき
五六三 玉吟東路や十綱橋も打はてりく雪の下にくつらん

十符浦

同

類考

五六四 六百更にけり頼めぬ鐘は音信て七ふさひしきとふの菅も
五六五 一弘誓百柿にたにふの浦風音信は野田の松かね片敷やせん

頭輔

五六六 十五符人ともふのすかともほさきと七ふあけてぬともしれぬ

輔親

五六七 同 いかへり七ふのさりまはらん待夜かき十符の菅も
五六八 一坂百霜はらふ鳴の上毛やいかならんとらふすかとも寒まななく

長明

五六九 同 玉篠に霰たはしる冬のはいほとせ寒るとふの菅も
五七〇 古歌陸奥のつなな菅も七ふには君をゆせて三ふに我ねん

重之

五七一 一草抄中 につためさりせは陸奥のつなな菅も中ねなまし
五七二 類聚陸奥の野田のすかとも片敷てかりねさひしきとふの浦風

仲文

五七三 新葉しき忍ふとふの菅もみふにたに君かぬ夜は我やねらる
五七四 新六ものつから十符の菅もいづく共誰にかわけん思ひ絶にき

無名

五七五 夫木波かくる玉ものねやのひしきものあまにや何をとふのうら入
五七六 御集ねさめする十符の菅もさえ侘て曉ひかく千鳥鳴なり

忠岑

五七七 夫木君待ともふの菅もみふにたにねてのみ明す夜もそ重ぬる

仲遠

五七八 後拾あやうきとみゆるとたえぬ丸橋のまらなとくる物思ひ賢

公朝

五七九 堀百いやまたふも見られすともすれば戸絶の橋のつらあたに
五八〇 夫木をちもの人やよはぬすみ渡る月に戸絶の橋なかりけり

親隆

五八一 同 いかにしてとたえぬ橋にならひてか渡らぬさきにかほあやふむ

宗遠

五八二 千首思ふ事おには末やともましし絶の橋には有とも

遠村

五八三 長歌となみ山手向の神にぬさまつりあか恋のまくほしけやし

家隆

五八四 同十八やきたちをとみみの関にあすよはらよりやりそへ君をとめん

有家

五八五 同十九となみ山飛越行てあけたては松のさ枝に夕されば

長雄

小侍徒

係季

河内

公実

公実

頭輔

長明

長明

長明 説人 不知

老俊

老俊

教長

教長 羽後 院鳥

相模

相模

俊類

俊類

実家

実家

李経

李経

為尹

為尹

家持

家持 大伴 10+

同

同

五八六 壩百妹が家にくものふるまひしるからんとおみの関をけり越くれば 頭季
 五八七 名奇越路にはせりみく程に成にけりとなみの関の雪の曙
 五八八 新六いつに我が指りせんやまたどのとなみの関に越せ暮ぬる 衣笠
 五八九 夫木となみ山飛越てなく郭公都にたれかきこなやむしん 為家
 五九〇 同 明渡るとなみの関のまきしくはつ別ゆくせなをとめよ 定嗣
 六〇一 名奇 旅ねて月ばかりとせもの浦の磯の室野に明ぬ此夜は
 六〇二 同 鞆浦に人もすさぬむろの木のいたしたのぬ年をたけろ
 六〇三 新六 梓弓いせへたたくる室の木のとことはにうつとも浦波
 六〇四 家集 船共はともとまれと佐人のなほけり心は過ぬるものを
 六〇五 夫木 とも浦の夜も遙に漕舟のせかひにみゆる磯の室の木
 仲業 俊頼 為家 行能

常盤山 丹波 磯城 山城 有同名

五九一 名奇 色かへぬ常盤の山の柳葉をいひひかざしつ方代のため 範兼
 五九二 同 年ごとく雪のふかさは常磐山せのたしさと兼て知哉 匡房
 六〇六 六帖よとに見しとらの嶋のふたありとしまけは更に頼ます 忠岑
 六〇七 後拾 白波の立なからした長門なる豊浦の里のとよりれよかし 能因
 六〇八 新勅 堤とは豊浦の宮につき初てせとへぬれと水は浅さす 貞信
 六〇九 名奇 思ひいつる時の浦にも憂人は志貝こそひろはれにけれ 貞信

富小山 同 藻塩

五九三 夫木 柳葉の色もはらしてけふよりはとみをと山にせと社まで 匡房

常世浜 丹後 仙寛抄 三当国

五九四 仙寛抄 ぶしにひ朝なをひらき我をればとよの浜の波りと聞ゆ 隆教
 五九五 夫木 時にみ山民の心もやすらけき御代のほしめの豊岡の里 隆教
 六〇一 名奇 今ほはやとら池のぬくりなほくる夜もしす人に恋つゝ 為家
 六〇二 玉葉 松か浦とまりの磯と聞物を名にもさほす帰る波哉 行能

豊岡里 備中 大木 三当国

富山 同 藻塩

五九六 夫木 とみ山のかけまきり行君か代にあへくに入たのもしき哉 兼盛
 五九七 同 昔より名つけそめたる富山は我君か代の為にと有ける 誠不知
 六二 新業 我庵はとこの山風来る夜に軒も月の影とほる也 尊良

鞆浦 備後 類考

五九八 万三 わきもか見し鞆のうらの室の木は常世にあれとみしとせむき 太宰卿
 五九九 同 七 海士小船帆がほれるとみるまで鞆の浦に波立るみゆ 無名
 六〇〇 同 好去て又帰る見んますくも手にもさしたるとも浦にを 同
 六二 玉葉 吟 土佐の海に御舟うかてあそふし柳の冬は風を長閑き 家隆

42才

六二六 夫木石をながめて出ぬ此たのは漕手もたゆまざる舟に
六二七 同 君が代は浪にわづらふとこの海の駒にまよする道も成まで

取替河

筑後

六二八 一万五 あらしきぬしりや川の河津に絶えん思ひ兼つも

跡見岡

未勘

六二九 万八 射目たてとみの岡への梅子の花さたふり我はもていん
はと人のため

六三〇 夫木誰ために手折てゆかん撫子はとみ岡へも今盛なり

共鳴

同 藤塩

六三一 万七 堀ひれはとも鳥に出て鳥たつ音遠さかろあまりすらしも

床海

同

六三二 玉葉床の海を我身こそ波よるとも打ぬる中に通し夢かは

六三三 玉吟びく浪よなくつもる床の海のとすむ虫や我身成覧

六三四 夫木とる海にわかれて落る泪河袖染はくはむし

遠津浜

同

六三五 万七 山越るとも(の)汝の若くし我きたるもてふふみとありまで

六三六 玉吟忘なむ遠津の浜の若くし山を越ても又か(り)みん

六三七 夫木逢事は遠津の浜の若くしはやししん思ふ心も

戸川菴

未勘

六三八 散木石はしるしかはの菴もむすふ手にしははもとむ物とこそまけ

隆親
法嗣

無名

鹿人⁴²⁷

顯朝

六二九 夫木石走る戸川の菴にゆく水のせきとあかたく過る春かな
六三〇 千五百 霞しく春のみとりふ成ぬれば今しほるときは木の杜
六三一 夫木 鶯の声より外も春やしる雪に花咲常盤木の森

常盤木岑

同

六三二 夫木 谷のく朝なる雲を満ぬらん麓もみえぬ常盤木の嶺

鳥屋野

同

六三三 万十四とやの野にもさきねらほりもさくくにねな(子)故に母にらほふ

六三四 堀川しつのおか柴かりみたるとやの今朝を霞はたな引にけり

六三五 夫木立帰り又も来て見ん若鷹のや野を出る秋の月

登遠留里

同

六三六 夫木行道のとまの里に御被して今としまぬと出けるれぬる

松葉名所和歌集第二終

鳥家

鳥家

鳥家

無名⁴³⁴

家隆

式親王

俊賴

衣笠

良平

俊賴

顯朝

家隆

高遠